

第一章 皇帝病

婚約について同意したとはいえ、ただちにその事実を公表する意思は、ラインハルトとヒルダのいずれにもなかった。

「発表は、ヤンとの戦いに決着をつけてからのこととしよう」

ラインハルトの判断にヒルダも異を唱えることはなかった。

もつともヒルダにしてみれば、『回廊の戦い』自体の必要性についてラインハルトに再考を促したいところだったが、これは無理であると判断せざるを得なかった。すでにラインハルト自身が、キルヒアイス帝国大公に向けて『予は戦いたいのだ』との開戦意思を明示してしまっている。今更に翻させることが、仮にできたとしても皇帝の権威を甚だしく損なうことなく、それをなすことは不可能だった。

超光速通信^フを介してのラインハルトとキルヒアイスの会話を確認し、ヒルダは嘆息すると同時に大きな不安に襲われずにはいらなかった。通話の中、ラインハルトは明らかに常軌を逸していた。ただ『戦いたい』との意思を、公^{おおよけ}にするだけならともかく、キルヒアイスとアンネローゼが男女の関係にあることを公然と語ったばかりか、二人の婚姻についてまで不用意に言及するなど、本来のラインハルトにあり得ざる振る舞いとし、ヒルダには映らなかった。

しかも、この通話の直後、ラインハルトは高熱を発して病臥しているのである。ラインハルトが健康に重大な不調を抱いてお

り、それがあの常軌を逸した、キルヒアイスとの通話に繋った。ヒルダはそう判断せざるを得なかった。

ラインハルトがバウアーシュミット医師による精密検診を受けたのは六月三〇日。すでに半年あまりの過去となるが、七月末を予定されたはずの検診結果の報告は、なぜか新帝都へはもたらされていなかった。この時期、イゼルローン要塞奪回を狙うヤンが動き出しており、旧帝都^{オーデイン}と新帝都、そしてキルヒアイスが征旅にある同盟首都ハイネセンの間の通信路は極度の妨害を受けるようになっていたのである。

ヒルダは公的私的双方の連絡網を使ってバウアーシュミット医師に連絡を取り、精密検査の結果を入手しようとしたが、不可解極まることにすべての試みが妨害を受け、確固たる情報を手にすることができなかった。

さらに彼女の手を縛ったのが、ラインハルトとの婚約が密かに実務化され始めたことだった。無論、帝国政府内外への発表はまだ先のことだったが、ラインハルトが皇帝として配偶者、すなわち皇妃を迎えるに当たっての法的な検討が始まったのだ。具体的には帝国における皇妃の政治的な権限に関する検討である。軍務尚書オーベルシュタイン元帥の懸念にもあったとおり、皇帝の配偶者、ないしはその親族が皇帝の寵愛を傘に統治に容嘴し、結果として治世の乱れにつながった事例は、何もゴールデンバウム王朝に限らず、あらゆる王朝国家に共通する弊害と言つてよい。民主共和政を標榜する自由惑星同盟や、かつての銀河連邦でも、権力者や官僚が閥閥を通じて結託し、暴政を恣にした事例すら珍しくないほどである。

こうした前例が枚挙に暇ない以上、皇妃の政治的権限の検討

に際して、ブルツクドルフ司法尚書をはじめとして『皇妃は原則としての政治的権限を有しない』という意見が主流となるのは当然のことだった。

ヒルダもその意見に正面から異を唱えようとは思わない。ラインハルトが健在であれば、皇妃が政治の前面に出る必要などない。皇帝の健在にもかかわらず、皇妃が政治的に発言するとすれば、それはすでにローエングラム王朝の体制に何らかのゆがみを生じていることを意味する。

ヒルダ自身が皇妃となった時、自らが政治的な判断を要するような立場に立たざるを得ないとすれば、それはすなわち皇帝としてのラインハルト、その最も優れた補助者であるキルヒアイス帝国大公、さらには帝国軍の双壁、オーベルシュタイン軍務尚書……彼ら全員の不在か、それに近い事態を意味する。そんな事態に陥ったなら、もはや法的に定められた権限云々など何の意味もない。ヒルダにとつては自明と言うべきだった。

本当の意味でヒルダを困惑させ、ラインハルトの健康に対する手配を取ろうとする彼女にとつての枷となったのは、この時期の法制官僚達を支配した、あまりにも馬鹿馬鹿しすぎる原則論だった。

「皇妃の候補となった女性は、その時点で政治的な権限を制約されるべきである」

最初にその主張を唱えたのが誰かは不明である。後の調査によつても、『皇妃の政治権限に関する作業部会』において最初にこの意見を述べた人物は記録されていない。にもかかわらず、作業部会が設置されて一ヶ月もたたないうちにこの意見が部会的主流となっていた。そればかりかまだ法的な条文の原案作成す

ら着手されていない段階で、現時点でヒルダに与えられている権限までを制約しようとする動きが一举に具体化してきたのである。

この時点におけるヒルダは政府において皇帝首席秘書官であり、軍においては幕僚総監であり、婚約が成立したとしてもラインハルトがそれらの職務停止を命じたという事実はない。だが、現実には、ヒルダは帝国政府組織を動かすに当たって非常な困難を覚え始めたのはまさにこの時期からだった。バウアーシュミット医師との連絡を阻害する、様々の有形無形の障碍の排除が、ヒルダにとつて途方もない難事となり始めたのである。

さらに時間もなさ過ぎた。一二月に入ると、ラインハルトは総旗艦『ブリュンヒルト』とともにイゼルローン回廊へと進発し、ヒルダも皇帝と行をとともにする。イゼルローン要塞はヤン・ウェンリーの手に陥っており、フェザーンを離れることで^{オーデイン}旧帝都との連絡はさらに困難なものとなったため、ヒルダは皇帝の健康に大きすぎる懸念を抱えつつも、バウアーシュミット医師との連絡を断念せざるを得なかったのである。

ラインハルトが、彼女の最悪の予想の通りに『回廊の戦い』の最中に倒れ、加療のために一切の戦いを断念してイゼルローン回廊から兵を退いたのは新帝国暦二年二月一日。ヒルダにとつて、悔やんでも悔やみきれない痛恨事となった。

ヴァリアビリティ・フルミナント・コラゲネ・クランクハイト
『変異性劇症膠原病』

バウアーシュミット医師によつて、その禍々しすぎる病名が告げられたのは『ブリュンヒルト』が^{オーデイン}旧帝都に到着した、新帝国暦二年二月二〇日、即日のことだった。

「すでに半年前、七月三十一日付けで、この報告をお送りし、その後何度も陛下への加療を進言したにもかかわらず、政府からは完全な無視を以て報われました」

その翌々日、治療方針詳細の決定のため、バウアーシュミットは再びラインハルトの病室に帝国政府首脳の参集を求めている。その席上、バウアーシュミットの、憤りと困惑と不審とが綯い交ぜになった指摘は、ヒルダを含む帝国政府首脳を驚愕させたと云ってよい。

「あなた方は皇帝陛下のお命よりも、ヤン・ウエンリーとか言う、同盟軍人との戦争の方が大事だとしてもおっしゃるのですか!？」

憤懣やるかたなしの形相そのままに言葉を荒げるバウアーシュミットをなだめたのは、当の患者たるラインハルトその人だった。

「そうして誰かの責任を問うたとして、予の病が快方に向かうというものもあるまい、ドクトル・バウアーシュミット。予が卿に期待するのは、医師として予の病の治療に当たってくれることであって、検察官として責任者の罪を問うことではない。それを納得してくれるか?」

皇帝にそう言われては、バウアーシュミットも糾弾者から医師にその立場を取り替える以外になかった。

この時点ですでにラインハルトの病状は深刻だった。

「一応、膠原病と呼んでいます、膠原病そのものは単に病気の症状を呼ぶに過ぎないものであって、一つの疾病ではないのです」

バウアーシュミットの研究でも、この病気の真の発症経緯は明らかになっていないかった。最初は、間欠的に発症する些細な

末梢血管での内出血や軽い内臓の炎症であり、その発症間隔が次第に短くなるに連れ、症状も劇症化してくる。最も致命的な症状は主要血管の炎症であり、これがやがて複数の臓器への炎症を引き起こし、最終的には多臓器不全を引き起こすことで患者を死に至らしめる。

「血管炎は従来の膠原病でも主要な症状の一つであり、確立した治療法も存在しますが、陛下の場合、これら従前の治療法では効果を期待できません」

それがバウアーシュミットを最も苦心させた点だった。情報を求める余り、違法を承知でのアンネローゼの詳細な健康情報の収集にまで手を出すことになり、それが、彼やマリンドルフ伯、さらにはヒルダまでを謹慎の身に追い込むことになった。

眉一つ動かさずに医師の説明に耳を傾けていたラインハルトが、初めて動揺を示したのはこの時だった。

「姉上にも、予と同じ病の可能性があるとどうか?」

「恐れながら、その可能性を確認させていただくのが目的でした。結論だけ申し上げます。現時点では大后妃殿下には陛下と同じ症状の予兆は一切現れておりません」

明らかに安堵した顔色になり、ラインハルトはこわばらせていた上体から力を抜いた。

「現時点で、遺伝的な要因が本疾病の原因であると判断する証拠はありません。申し上げられるのはそこまでです。あと、不法を承知で大后妃殿下に関する情報を入手いたしましたのは、陛下の治療法の研究のためという目的もありました」

「それは?」

身を乗り出したヒルダに、バウアーシュミットは言う。彼の研

究が示す限り、ヴァリアビリティ・フルミネント・コラーゲノ・クラフタイト変異性劇症膠原病は免疫上の異常である。体内で、ラインハルト自身の免疫機構が自らの肉体を異物と認識し、排除を試みている。その結果が血管をはじめとする体内での炎症であり、この免疫機構の異常を抑止しない限り、ラインハルトの病状は重篤化しこそすれ、軽快する望みはない。

言い換えれば、ラインハルトの健康を蝕みつつあるのは、ラインハルト自身と言うことになる。まるで強すぎる焔が己自身をも焼き尽くさずにはおかぬように、ラインハルトという強烈な炎は、眼前の敵のみならず自身をも灼こうとしているのではないか。一同が見交わした視線の中にうそ寒いものがよぎったのも無理からぬことだった。

「それと姉上の健康状態と、何の関係があるのか？」

「私をご提案できる治療法は、まず陛下のお体の免疫機構の機能を病気の進行を一時的に停止させる程度まで低下させること。ついで、大公妃殿下より免疫細胞のご提供をいただき、未分化細胞と組み合わせて陛下のお身体に移植します。これによって、陛下の免疫機構を正常な状態に再建すること。これのみです」

バウアーシュミットの説明に、病室内の一同は互いに顔を見合わせたままだった。

この時、病室に同席したのはヒルダをはじめとして、ロイエンタール、ミッターマイヤー、オーベルシュタインとメックリングーに加えて、マリィンドルフ伯爵、ファン・デル・ファールト国務次官とシュトライト中将の八人。政戦のいずれの分野においても、当代を代表すべき人物たちだったが、残念ながらバウアーシュミットの説明の意味を即座に理解できるだけの医学的

知識には欠けていた。

その中で、ラインハルトの表情のみ、医師の言葉の十全の理解を示して険しかった。

「免疫機能の働きを止め、病状の進行を止めるというのだな」

「さようです」

「免疫を持たぬ人間は、その身を外気に曝すことすらできなくなると聞く。卿の治療に従った場合、予はその間、政務を執るどころか、人としての生活も満足にはできなくなる。そういうことだな？」

複数の足が床を踏みならす音が轟く。その目前に翻ったラインハルトの指先に制せられ、思わず医師に詰め寄ろうしていた幾人かは上体を前につんのめらせるようにして、その場に静止した。

「ご賢察の通りです。ただ、完全に免疫機能を止めてしまうと、いかに外部からの感染を防いでも、既に体内にある潜在的に有害な細菌類があらゆる疾病を発症させることになります。これを抑え、かつ陛下の御病の進行を止めて治療の時間を稼ぎ出す。そのぎりぎりの兼ね合いを計る治療となります。無論、陛下には治療の間、完全無菌病室にて過ごしていただきます。私を含め、看護の人間、部下の方々とも、直接の接触は控えさせていただきます」となります」

「期間は？」

「少なくとも半年。最悪の場合は一年を超えると予測します。さらにその後、一年は治療結果の定着とお身体の回復のため、宇宙にお出になること、皇帝としての政務に当たられることなど、お身体に負担をかけることは極力お控え願ひ、療養に専念してい

ただかねばなりません」

「姉上から免疫細胞をいただくと云ったが、姉上に危険はないのか？」

「お生命に危険はありませんが、健康を害されるリスクはあります。さあらずとも、細胞を採取させていただいた直後、二月ほどは抵抗力と体力の衰えを来しますので、寒冷地への訪問や過激な運動などは一切控えていただく必要があります……が、これは陛下の治療のため、冒さねばならぬリスクと考えます」

「……そうか」

苦いものを飲み下す表情でラインハルトは頷いた。

「姉上には予自らお願いしよう」

アンネローゼがそれを拒むことなど考えられない。ラインハルトにしてみれば、そのこと自体が重い負荷となつて胸にのしかかる思いに違いなかった。一〇歳の日、姉を救うためと、キルヒアイスとともに志を立て、ひたすらに宇宙を走り抜けてきた。その結果、自らの生命を救うため、姉に再び頼らざるを得ない身となつてゐる。またしても、自分は姉を救うのではなく、救われる立場になつてしまった——キルヒアイスがしばしば襲われる、自らの無力を嘆く思いを、この時のラインハルトは共有していた。

その思いが連想を呼んだのだろう。ラインハルトははつとしたようにその目を見開いた。

「……キルヒアイスとは連絡が取れたのか？」

「とりあえず一報は達しております」

ロイエンタールが応じる。

「陛下御不例のため、イゼルローンへの軍事活動を休止するこ

と。ヤンと暫時の和平を結んだ後、同盟に対する残務処理を完了させ、帝国へ帰還すべきこと。帝国大公には以上を達しあります」

「キルヒアイスはいつごろフェザーンまで戻れるのだ？」

「まだ、帝国大公からの正式の報告はありません。臣は、おおむね三ヶ月は要するものとみております。オーディンとなりますと、さらに半月は要するであります」

「卿の見積もりならば否定すべき理由はない。キルヒアイスには、予の病状の詳細を含め、十分に情報を伝えよ。重ねて命じる、予の代行として帝国統治の最高責任者の責を負うべく帝国大公に命ぜよ。先にオーディンへの帰還を命じたが、新帝都をフェザーンとした以上、フェザーンにて統治の実をあげよ、とな」

「御意」

深く腰を折つて皇帝の意を肯い、ロイエンタールはふと視線をヒルダに走らせた。

「差し出口とは存じますが、陛下のご婚約の公表はいかがいたしましょうか」

ヒルダのブルーグリーンの瞳と、ロイエンタールの金銀妖瞳……碧い左目と闇色の右目が一瞬、彼らの主君を挟んだ中空で交錯し、かすかな光を放つたように見えた。『回廊の戦い』の前、ラインハルトがヒルダと交わした婚約が、政府では閣僚・次官レベル、軍においては大将にまで公表されたのが昨日のことである。最も信頼する秘書官、あるいは副官や副司令官・参謀長に対してもまだ口をつぐむこととの条件付きではあったが、緘口令の期限はそう長いものではないとも説明されていた。

「このような際です……その、ご快癒まで延期なさつてはいかがでしょうか？」

ファン・デル・ファールト國務次官のやや遠慮がちな提案に、ラインハルトはゆるやかにかぶりを振って応えた。

「準備が整い次第、公表せよ。予が皇妃を娶る意思を明確に示すことで、予の回復への疑念を払拭させるのだ。病名も公表せよ。ただ、先ほどのドクトルの説明までは公にするには及ばぬ。聞いてもわからぬとは思わぬが、逆に混乱を起こす者も多くなろう。予が困難な病に倒れ、一時、玉座を離れる。その間、帝国大公に政務の代行をゆだねること。そして、回復の後、フロイライン・マリーンドルフを皇妃に得て、ともに玉座に復帰するであろうこと。これらを帝国内に公表せよ……発表のための原稿は……」

険しかった表情を、この時、初めてラインハルトは緩めた。

「フロイライン・マリーンドルフ、申し訳ないが、あなたにお願いする。一週間以内に準備を整えてほしい」

「……はい」

ヒルダの頬を彩った微かな紅さは、果たして恥じらいと戸惑いだけだったのかどうか。彼女は今一度、一瞬だけ視線をロイエンタールに投げ、彼がすでに鋼鉄の彫像めいた横顔を向けているのを確認すると、深々と一揖した。

「承りました、陛下」

「——一つ言っておく」

ラインハルトの声が鋼の鞭の硬質さを帯びて室内に響く。蒼氷色の双眸が、死病ともいうべき重病を身のうちに抱えた病人とは思えぬ烈しさで一同を窺いだのように見えた。

「婚約を正式のものとしたとしても、正式に予と婚姻し、皇妃たるの座に即くまでは、フロイライン・マリーンドルフは予の首席秘書官であり、幕僚総監たる軍の指導者の一人である。その点を

失念する者の無きとはせぬ。予の懸念をよく下僚に伝え、判断を誤らぬよう指導せよ」

驚いて目を瞠るヒルダに、視線だけで頷いてからラインハルトはもう一度、彼の臣僚たちに、勁烈過ぎるほどの光をたたえた蒼氷色の視線を向ける。それを受け、バウアーシュミットを除く全員が一斉に跪礼を取り、皇帝の意を受ける旨を誓った。

小さく頷き、ラインハルトはバウアーシュミットに視線を戻した。

「ドクトル、治療を始めてくれ。直ちに、だ」

「……お待ちください」

割り込む声に、一同が驚く視線を向けたのはファン・デル・ファールト國務次官だった。

「臣は医学には無知の身でございますが、ドクトル・バウアーシュミットの治療法はあまりに冒険的に過ぎ、かつ陛下のお生命に対する危険に満ちておるように、臣には危惧されてなりません」

ラインハルトの眉間に小さく雷光が走ったように見えた。

「他に手段はないのだ、控えよ、國務次官」

「他に手段がないかどうか、あるいはドクトルの治療法にどの程度の確度があるかを、文理科大学なり、帝立大学の医学部に諮問すべきと臣は考えます。この結果として、他の手段があればその採用を検討することもできましょうし、万一、ドクトル・バウアーシュミットの研究が的外したものであった場合には、急ぎ、他の手段の研究のため、帝国医学界の総力を結集させるプロジェクトチームを組織することもできましょう」

「陛下はすでに決断なさっている。それに、陛下は控えよとおつ

しやった。それ以上は不敬となろう、控えなさい」

次官を遮ったのは意外にもマリィンドルフ伯だった。一瞬、ファン・デル・ファールトは棒でも飲んだように硬直し、それから彼の上司に向かって腰を折った。

「失礼をいたしました。尚書を差し置いての差し出口、どうかお許し下さい」

予のためを慮ってくれてのことだ、恥じるには及ばぬ……あるいは皇帝の発言を期待する者もあったに違いなかった。しかし、ラインハルトはファン・デル・ファールトには一瞬だけ視線を向けたのみで、何も言おうとはしなかった。ヒルダはわずかに不審の目を走らせ、ロイエンタールは刃にも似た視線をファン・デル・ファールトに突き刺し、さらにはオーベルシュタインの義眼もまた微かな白いもやを漂わせつつも、思いがけない発言者に表情のない視線を向けたが、彼らもまたその場で新たな発言をなすことはなかった。彼らにとつて焦眉の急は、不規則な発言者の非礼を咎めることではなかった。皇帝の生命を救い、玉座に再び彼の姿を見いだすための手立てを打つことだったのである。

ラインハルトの発病と治療開始に関する公式発表は、日ごと
に尾ひれを膨らませながら『皇帝^{カイザー}ラインハルト、病篤し』の噂をとにかくも一掃することになった。同時に、『玉座に復するに、皇妃と共にせん』との発表も、一時は帝国を席巻しかけたラインハルトの回復に対する悲観論を払拭する上で確かな効果を示した。

「^{ホーフ・カイザーリッ}皇妃万歳!!」

一部の、気の早い者たちの間では早くも歓声が上がり、無数の追隨者呼んだ。

「^{ホーフ・カイザーリッ・ヒルデガルト}皇妃 ヒルデガルト万歳!!」

「皇帝御夫妻に万歳!!」

さらに一層気の早過ぎる叫びも帝国各所で上がった。

「皇太子殿下に万歳!!」

「いや、お美しい皇女殿下に万歳!!」

すでに昨年となつた新帝国暦一年は、その最終盤において『回廊の戦い』という巨大な戦いが戦われ、それに先んじては何件かのテロや、自由惑星同盟での騒乱、それに伴う帝国大公キルヒアイスによる同盟領への再征戦など、実に多事多端であつた。ラインハルトの病臥は帝国の人々に大きすぎる衝撃を与えたが、その治療が開始されたこと、そして回復の後には皇帝が伴侶を得ることが明らかにされたことで、新帝国暦二年は漸く動乱が安定に向かうべき年となるであろうことを人々に期待させたのである。

だが、すでに述べたように、帝国がその全土を挙げてラインハルトの婚約を歓迎したわけではなかった。

「すでに皇帝陛下は、回廊を埋めた戦死者のことなど視野に入
れておられない。こんなにも多くの帝国臣民が、喪つた夫を、息子を、婚約者を、そして恋人への悼みに苦しみ、悶々としている、この時期に……婚約などを発表されるわけではないではありませんか」

繰り返しとなるが、婚約の発表と同時に、この悪意に満ちた囁きは帝国の、特に辺境に属する宙域を少しずつ、少しずつ侵し始

第二章 魔術師還らず

めた。さらに、帝国大公キルヒアイスによる皇帝の代行の発表も、辺境宙域の多くで正確には伝えられず、それどころか『国務尚書マリーンドルフ伯が、皇帝の義父として摂政の座を得た』などという、根拠不明の噂までが帝国政府の正式発表として伝えられた宙域すらあったのである。

こうして、一見、帝国の安定に対して何らの影響をも与えなかったかのように見えたラインハルトの病臥は、その実、成立したばかりのローエングラム王朝の土台に、僅かずつ僅かずつ、致命の亀裂を穿ち始めていた。ラインハルトが健在であり、あるいはキルヒアイスがラインハルトの傍らにあれば、この亀裂が、王朝そのものを揺るがすまでに成長する前にその存在に気づき、修復することも叶ったであろう。

しかし、ラインハルトはすでに病臥の身となり、彼の影として、あるいは半身として帝国を支えるべきキルヒアイスはなお自由惑星同盟に足止めされていたのである。

物語の舞台は自由惑星同盟へと移る。

『正史』に言う——ヤン・ウェンリー自身は、自分が暗殺される可能性についてどう考えていたのであろうか……と。彼の意識は目前に迫った巨大な恒星、ラインハルト・フォン・ローエングラムに集中しており、その周囲や後背に策動する細やかすぎる星辰の動きになど関心を寄せている余裕はなかった。つい一年ほど前、ヤンは自身の属する国家の政府によつて謀殺されかけた。これに対して、フレデリカやシェーンコップの助けを借りてハイネセンを脱出したが、彼がすでにそうした陰湿な動きを察知し、十分の諜報の目を張り巡らしていたからできたことだった。

同盟政府内に、彼がと言うより、シェーンコップとバグダツシュが立案し、一部はベンドリングがサポートしてばらまいた目と耳は、彼の脱出と、その後の騒乱の中でほとんどが雲散霧消していた。アンドリユー・フォークがレベロ議長の承認の許に精神病院を出され、ヤン謀殺計画の続編を演じるべく宇宙に出ている、などとは想像もつけようがなかった。

ラインハルトが突然の病臥で王師を旧帝都に退かせ、ヤンに向かつて外交の門を開いた。ヤンの眼前からはラインハルトという巨大で輝かしい巨星の姿が消え、彼の視野にはそれまで目に入らなかつた些細で陰鬱な動きが、見えるともなく映り始めていたのも事実である。

その一つが地球教に関する情報だった。ヤンとフレデリカの結婚に合わせるように地球へと旅だつていたユリアンは、『回廊

の戦い』の前、エル・ファシル政府に合流したヤンの消息をとらえてエル・ファシルへとたどり着いた。『回廊の戦い』が終わり、戦場の混乱が一段落ついた時、ユリアンは地球教本部からもたらした情報の確認を提案した。

周知のように、ユリアンが携えてきた情報は、同盟・フェザーン・帝国に関する裏面史というべき内容だった。フェザーン成立の経緯、帝国における奇怪な協力者、および地球教が同盟政府内部深くに張り巡らした陰謀の地下茎の巨大さを物語る資料を前に、ヤンをはじめとした一同は首筋にうそ寒さを感じ、互いに白茶けた表情を見交わしたのだ。

「そう言えば、トリユーニヒトが最高評議会議長になったところからサイオキシンの麻薬中毒患者が急増しましたね……」

資料は、地球教がある時期から同盟政府高官と手を結び、政府機関の手を介して同盟領全域にサイオキシンの麻薬の供給ルートを確立した旨が記載されていた。地球教は、サイオキシンの麻薬を介して信徒を獲得し、いったん入信した信徒を麻薬で縛り付けた。政府高官……残念ながら氏名やプロフィールは記載されていなかったが、最高評議会の委員レベルの高官であることに間違いはなかった……は、地球教が信徒から吸い上げる利益の分け前にあずかることで、その政治的影響力を維持・拡大し続けた。

ユリアン自身、地球教本部で『サイオキシンの麻薬のケチャップ漬け』(© オリビエ・ポプラン)』を食事として供され、その拒絶反応の凄まじさを身を以て体験している。地球教と同盟政府による地下での握手には、総毛立つほどの嫌悪を感じずにはいられなかった。

「誰でしょうね、この高官？」

「今、その詮索をしている暇はない。少なくとも、同盟政府が、市民から賛仰されるに値するような、高潔な組織ではなかったということだね」

ヤンにしてみればため息しか出ない。皇帝ラインハルトに向かって、専制よりも民主政が優れている。大きな顔で説いたものだが、その実態といえればこれである。制度そのものの問題ではなく、それを運用する人の問題だとも言えるのだが、一旦、制度を恣意的に運用してしまう人間が組織の長に就けば、容易なことではこれを排除できないのも、専制制度と大きく違わないのではないか。そんな疑問すら浮かんでしまう有様である。

「こういう結びつきは、今も続いているのでしょうか？ まさかと思いますが、各星区政府も同様に地球教に汚染されているとすれば、味方と思っていた存在から背中を刺されるなどと言うことも警戒せねばなりません」

苦虫をかみつぶしたような表情でつぶやくムライ参謀長に、ヤンは肩をすくめてみせる。

「それも可能性はあるが、今はその有無を議論している時間はないよ。ただ、この情報をキルヒアイス帝国大公には提供する価値はありそうだね」

意外そうな一同に、ヤンは逆にさらに意外そうな表情になった。

「今、実際に同盟を支配しているのはキルヒアイス帝国大公だ。地球教にしてみれば、帝国大公が彼らと旧同盟の統治組織の結びつきに気づいていない今がチャンスだとも言える」

「チャンス？」

「帝国大公暗殺のチャンスだよ」

既に同盟政府は失われたも同然である以上、ここでキルヒアイス帝国大公が喪われれば、同盟領は完全に崩壊することになる。テロの主目的が社会の安定性を破壊し、混乱と恐慌を巻き起こすことで、テロの実行者に対する市民の支持……とまではいかなくとも畏怖を植え付けることである以上、キルヒアイスは彼らの格好の標的であるべきだった。

「多少あざといかもしれないけれどね、これで我々と帝国大公の間に共通の敵ができる。単純にエル・ファシルなり、イゼルローン要塞なりを譲って下さいというよりも、握手の機会は広がると思うよ」

「帝国大公が現実狙われていると……？」

バグダツシュの指が動き、スクリーンに表示された一つの単語を指し示した。『ヴォルフスフロント』……その単語はそう読めた。帝国内におけるフェザーン、あるいは地球教の協力者。組織の名称だけで、その目的も役割もすべてが空白だった。

「目的も役割も面に出せない組織は、そのこと自体で、その組織の機能を語ってしまってますからね」

「さすが専門家だな」

シェーンコップの嫌みをバグダツシュはさりげなく無視した。ヤンが小さく苦笑して、言葉を引き取る。

「つまり、暗殺・破壊工作。そんなところかい？」

「ご名答です、元帥。帝国内に、おそらくはまだ、今の帝国政府も気づいていない組織的な専門の暗殺集団がいて、こやつらが地球教、ひいてはフェザーンと連んでいた。そういうことになります」

「分かった。バグダツシュ、この資料をもう少し調べてくれない

か、この『ヴォルフスフロント』とかいう連中のことが、この資料のどこかほかのところにでてこないかというあたりをね。必要ならベンドリング大佐にも手伝ってもらおうといい……」

言い止し、ヤンはちよつと眉をひそめた。そのベンドリングは、『回廊の戦い』で彼の被保護者であったグレーチエンを失ったショックで暫時の休養に入っていたのだ。バグダツシュは唇を軽くゆがめたが……

「いや、もう大丈夫でしょう」

グレーチエンの艦『ハリファックス』は帰還していないが、今のところ、撃沈された証跡は上がっていない。帝国軍の捕虜になつている可能性も否定できず、今回の和平が成功裏に終われば、彼女の消息も辿れるのではないかという可能性でも出てきているのだ。

「どうやら、その辺で折り合いをつけたようです。ま、彼にすれば唯一の家族でもありますし、それにまあ……」

「まあ、なんだい？」

「いや、推測でものを言うのはやめておきましょう。資料調査の方は、提督が発たれるまでに、帝国大公へのいい土産を探し出せるよう、微力を尽くします」

「謙遜することはないぞ、全力でやってくれて構わん」

シェーンコップの皮肉を、再びバグダツシュは鼻の頭にしわを寄せながら無視した。

ことほどさように、この時点でヤンが暗殺の可能性を予想していたのは、まずキルヒアイスであり、それに次ぐ者として皇帝ラインハルトだった。ヤン自身について言えば、彼自身を暗殺したところで、皇帝ラインハルトにとって最大の敵手を斃してや

り、その支配体制をより鞏固なものに仕上げる手伝いをするだけのことではない。そ例外に判断のしようもなかったのである。

たとえ暗殺の危険を察知していたとしても、ヤンに講和への会見を拒否する選択肢はなかった。すでに手持ちの兵力は半分以上に激減し、イゼルローンも要塞同士の砲撃戦で深手を負った状態にある。翻って、フアーレンハイトを欠き、黒色槍騎兵艦隊^{レイター}の過半をパルメンド宙域の藻屑と化せしめたとはいえ、帝国軍はなお一〇万隻を優に超える兵力を保持し、キルヒアイスと双壁を代表とする将帥たちも健在である。彼らが今一度、大挙してイゼルローン回廊に殺到してくれば、いかにヤンの用兵を以てしても支えきるのが困難なのは自明だった。

ヤン・ウエンリーが、皇帝^{カイザー}ラインハルトではなく、その代理者たるべきキルヒアイス帝国大公との会見に臨むべく、イゼルローン要塞を離れたのは四月一〇日一二時〇分。乗艦は、先の『軍事査問会』に際して試用した巡航艦『レダロ』。副参謀長のパトリチエフ中将、薔薇^{ローゼンリッター}の騎士連隊のブルームハルト中佐、ビュコック元帥の副官であり、ビュコック艦隊との連絡^{リエゾン}士官としてヤンの幕僚に加わっていたスーン・スールズカリッター少佐……この時期はすでにスーン・スールに改名している……の三名のみだった。

ヤンが妻であり、最も信頼する副官であるフレデリカを伴わ

なかった理由は史実の記すとおり、彼女が悪質な^{インフルエンザ}感冒に罹患したからである。彼女に代わり、ユリアンとシェーンコップが同行を希望したが、ヤンは却下している。

フレデリカが同行できない以上、ヤンの側近ナンバーたるべきユリアンの代行は当然とみられていただけに、このヤンの判断は『ヤン・イレギュラーズ』

「特に理由があるわけじゃない。私が行けないなら、代理はユリアンに頼む。でも、私が行く以上、ユリアンにはイゼルローンの留守居を頼みたい」

『正史』はこのあたりの事情を、『靈感と呼ばれる便利なものが時間外勤務を行った』などという微妙な言い回しで述べているが、真実は不明である。ヤン自身は、この時の選択の理由について語らなかったし、ユリアンも、その著書においてすら、この時の事情は曖昧にしか述べていないのである。

一方、シェーンコップについて言えば、理由は明白だった。彼の存在が帝国軍のみならず、味方たるべき臨時革命政府にとつても威圧的すぎたのである。

エル・ファシル臨時革命政府のロムスキー主席が一〇名の随員とともに『レダロ』に乗り込んだため、ヤンが遠慮したことは広く知られた史実である。

「なぜ、もつと護衛を伴わなかったのか。スペースがないというのであれば、『ヒューベリオン』なり、『ユリシーズ』なりでも良かったのではないか。帝国軍は使者としてすら戦艦『プロツケン』を派遣してきているのである。ヤンが戦艦で出向いたとしても、帝国軍がそれに異を唱えるはずもなかったではないか」

後世において、ヤンの随員の選択に対する批判を述べる声は

小さくない。

「ロムスキー主席が一〇名の随員を伴うと主張したとき、ヤンは異論を唱えるべきだった。実際に帝国軍と戦い、二〇〇万を超える犠牲者によって、帝国との講和に至る險路を拓き、ついにその門を開いたのはほかならぬヤン艦隊だったのである」

エル・ファシル臨時革命政府に対する批判は、当時も、また後世においても辛辣を極める。

「翻つてエル・ファシル臨時革命政府なるものが何をしたか。彼らは、帝国軍の砲火の暴風に対して、無防備惑星宣言とヤン艦隊の武威の影に、ただ首をすくめて、身を潜めていただけではないか。彼らが皇帝^{カイザー}ラインハルトなり、帝国大公キルヒアイスなりに僅かとも交渉の門を開くべく、なにがしかの努力をでもしたというのか。彼らは何もせず、ただ、帝国との講和、そして民主共和制の継承者の立場という果実が銀の皿に載せられて彼らの前に供されるのを、ただ便々と待ち構えていただけなのである」

のち、臨時革命政府のヤンに対する陰謀の存在が公のものとなると、非難の声は一層高く、大きくなった。ヤンの身柄を帝国軍へ差し出し、見返りとしてエル・ファシル宙域の自治を獲得しようという、陋劣さを極めた陰謀がそれである。

この陰謀を、実行寸前に却下したことで、ロムスキー主席は『同盟を滅ぼした政治家者』のリストに名を連ねる不名誉から自らを救ったことになる。ちなみに、このリストの首座には、本人にとっては不本意の極みであろうことに、ジョアン・レベロがその名を記している。

「エル・ファシル臨時革命政府を評価する際、史家は冷徹な第三者ではなく、どうしても糾弾者の立場を取ってしまう」

ある史家は嘆息を込めて著書に記している。

「なぜなら、彼らはヤンの存在を危険視し、その排除をすら試みたのである。『回廊の戦い』において既にしかり……そして、戦いの後ですら、なお然りであつたからだ」

ロムスキー主席が伴つた一〇名の随員は、まさに『戦いの後ですら、然り』の具体的な現れだった。

『彼らは、ヤンが彼の一派だけの存在を帝国に認めさせることで、事実上の臨時革命政府の首座たるを確保しようとしている。そのような妄想と邪推にとりつかれていた』

ある史家は痛烈な言葉を連ねて、ロムスキーとその側近を批判している。

『一〇名もの不要不急の随員が『レダロ』に乗り込んだのは、ヤンとキルヒアイス帝国大公との会談を監視し、あわよくば会談の主導権をヤンから奪い取るのが、その主要な目的だった。彼らは、ヤンが望んだような、いかに民主主義制度を保存するかなどというビジョンに彼らは何の関心もなかった。その興味は、彼らの政府における地位を帝国に認めさせ、維持する。ただ、それだけだったのである。会談が、彼らの陪席において行われていれば、その結果はヤンにとつて落胆と失望をのみを生むものとなつていたに違いない』

ただ、ヤンの随員については最後の最後になつて僅かな変更を強いられることになった。

「パトリチエフ中将がヤン元帥の幕僚代表で、スール少佐がビュコック元帥の代理、ブルームハルト中佐が護衛役と言うことであれば、もう一つの艦隊からも、護衛役を兼ねてもう一人くらい代表者を送り込んでも問題はあまるまい」

出発間際にそう申し出たのは、ほかならぬ『もう一つの艦隊』の代表者たるウランフ大將だった。

「私は代理人を立てる必要はないだろう。心配することはない。会談を邪魔したりはせんよ。ま、要するにこれまで悪運強く生き延びたのだ。皇帝^{カイザー}ラインハルトとは言わぬが、帝国大公キルヒアイス。わざわざ顔を見に行くだけの価値のある男には違いなからな」

あつけにとられるヤン、『閣下の代理としてなら小官が』と主張するチェン・ユイルン參謀長を尻目に、身の回りの品を詰め込んだダツフルバッグ一つを手に、ウランフはさつさと『レダロ』に乗り込んでしまったのである。下船を説得しようにも出航は迫っており、その時間はなかった。

「ありやあ、完全に計算ずくだな」

評したのはポプランであり、ヤンも異論はなかったが、彼は肩をすくめてあつさりとウランフの説得を断念した。

「いいさ、随いて来てもらおう。私も心強い」

こうして、ヤンと彼の幕僚三名、およびウランフ大將、およびロムスキー主席とその随員一〇名を載せた巡航艦『レダロ』はイゼルローン要塞を出航する。先にも述べたとおり、四月一〇日一二時〇分のことである。

「ヤンに会いたい、ヤンはまだ生きてるか?」

海溝の底に沈むほどの低レベルの冗談。ポプランに酷評された開口一番の叫びと共に、ボリス・コーネフが凶報をもたらしたのは、『レダロ』出航後三日目のことである。

「アンドリユー・フォークが精神病院から退院した? 最高評議会長の正式の許可を与えられて、同盟軍少将に復職した上で、艦隊を率いてハイネセンを出ただと?」

「ああ、同盟政府からの命令はヤン元帥の抹殺。罪状は、同盟政府に対する反逆」

信じがたい内容だったが、コーネフの情報は、まさにその同盟政府最高評議会の最高幹部クラスからもたらされたものであり、ヤン艦隊幹部達はそれが事実であることを信じざるを得なかった。

「うそだろ、おい……」

ポプランが、彼にしては滅多にないことに色を失った表情でつぶやいた一言が彼ら全員の意識を代弁していた。

「アムリッツアで二〇〇〇万殺しておいて、まだ殺したらなんて言うのか。殺すなら自分を殺せ——!!」

アッテンボローの激昂を、シェーンコップが引き取った。

「やつの全生涯をかけた大事業なんだろうさ。凌駕できなければ殺す。漸く、その境地に達したということかも知れんし、同盟政府はまだ自分たちが人類社会の半分を支配しているなどと言う夢物語の中で眠りこけているんだろうが、いずれ首謀者は連中じゃあるまい」

「地球教団と……例の暗殺組織?」

背筋を氷塊が上下し、全身に悪寒と虚脱感が襲うのをユリアンは感じていた。シェーンコップの言うとおり、同盟政府首脳の妄想がフォークの妄念と結びついた上での突発的な事件ということではないのか。ヤンの出発前、彼らは地球教団とフェザーン、そして帝国における一〇〇年来の陰謀の存在を

知った。彼らが、今回の事件の裏で糸を引いているとすれば、こ
とはフオーク一人の暴走で済むはずはない。

「真相を議論している暇はありません。すぐに救援部隊を出し、
ヤン提督にイゼルローン要塞へ戻ってもらいます。帝国には、あ
とで説明しましょう。幸い、あの地球教団からの情報があります。
キルヒアイス帝国大公なら、きつと話せば分かっています」
ユリアンは、数年前、彼に向かつて『元気でいて下さい』と握
手してくれた、赤毛の感じの良い長身の青年の姿を思い浮かべ
ていた。

ただちに六隻の戦艦と一〇隻の駆逐艦が動員され、アッテン
ボローの指揮下にシェーンコップ、ユリアン、マシユンゴのほか、
薔薇の騎士連隊員数百名が同行してイゼルローン要塞を躍り出
たのは、それから間もなくのことだった。

『ヤン・ウェンリー暗殺事件』の経緯は、史実の語るとおりで
ある。

宇宙暦八〇一年、新帝国暦二年四月一三日、ヤンがブルームハ
ルトを相手に三次元チェスで連勝を果たした後、就寝しようと
ベッドサイドの明かりを消した〇時四五分、『レダロ』の探知網
は、高速で接近してくる数隻の艦艇を発見した。軽巡航艦一隻と
駆逐艦三隻からなる艦隊は、同盟軍辺境警備第二艦隊の所属
を名乗り、『レダロ』に対して識別信号の送信を要求してきたの
である。

『レダロ』艦長ルイシコフ中佐にしてみれば、これは噴飯物の
通信だった。

「辺境警備第二艦隊だと。辺境警備艦隊は、警備宙域を名乗る

のが同盟軍の制式だ。ナンバー・フリートなど存在するはずがな
い」

ルイシコフ中佐は『レダロ』を変針させ、最大戦速を取らせた。
『レダロ』級巡航艦の、同盟軍最高速の速度性能を活かして、正
体不明の艦隊から離脱するつもりだったのだが、その進路に現
れたのが、今度は帝国軍の重巡航艦二隻だった。

「キルヒアイス元帥麾下の巡航艦『オッフエンハイゼン』と
『エーゲンスバッハ』です。ヤン元帥をお迎えするため、キルヒ
アイス帝国大公閣下から差し向けられました」

彼らはそう説明した上で『レダロ』を護衛するように、その後
方に回り込む。と同時に、追尾してきた『辺境警備第二艦隊』
に対していきなり発砲したのだ。重巡航艦二隻と、軽巡航艦一隻、
駆逐艦三隻では勝負にならないのは自明であり、『辺境警備第二
艦隊』は瞬時に、搭乗者もろとも火球と化して宇宙の藻屑と化
した。

この後、『オッフエンハイゼン』と『エーゲンスバッハ』は『テ
ロリストを処分した』と称して、『レダロ』に対して接舷と『ヤン
艦隊の代表者に対する挨拶』を求めてきた。ロムスキー臨時革命
政府主席がこれに応じたのも、広く知られている史実そのもの
である。そして、接舷した『オッフエンハイゼン』との連絡通路
を通じて現れた帝国軍の軍服を身につけた男たちを出迎えたロ
ムスキー主席であり、その彼にむかつて熱線銃^{ブラスタ}を突きつけた彼
らに対して、主席が放った第一声もまた史実に記録されること
になる。

「あなたがたが何を望んでいるのかは知らないが、銃を突きつ
けるとは非礼でしょう。まず銃を仕舞いなさい」

先述したように、エル・ファシル臨時革命政府に対する後世の批判は非好意と辛辣さの二色の塗り分けにつきては、言つて良いが、唯一ロムスキー主席に対してだけは好意的な評価をなしとしない。

「皇帝ラインハルトの帝国に対抗する、宇宙唯一の政治的勢力の代表者としては、ロムスキー主席は決して最適と呼ぶに値する資質の所有者ではなかった。彼の欠点は、起き得るあらゆる出来事が、すべて微笑^{わら}つて許容し得る範囲に治まると錯覚していたところにあつた。しかし、彼が寛容の人であり、ともすれば先鋭化しかねなかつた、極度に文民統制に固執する彼の下僚と、ヤン艦隊幹部達の間での潤滑油たるべき存在を堅持し得たのもまた事実である。ただし、この時だけは、『笑つて済ませる』場合ではなく、彼は最後までそれを認識し得なかつた」

結果として、ロムスキー主席は、帝国軍士官を名乗る彼らによつて問答無用の狙撃を受けて即死。一〇名の彼らの側近達は悲鳴を上げて逃げ散り、暗殺者たちを『レダロ』の艦内深くへと導き入れた。

「ヤン提督は彼らを同伴すべきではなかつた」

後世の批判が集中するのも、この時の彼らの行動に起因する。悲鳴と叫喚を伴いつつ『レダロ』艦内奥深くに逃げ込んだ臨時政府首脳達は、本来なすべき事を一切為さなかつた。暗殺者の侵入と、彼らのターゲットに関する情報を、『レダロ』のブリッジに達するという、テロールに際会した政治家として最も優先して為すべきことを一切放棄したのである。恐慌に陥つた彼らは、パニックに顎門^{あぎと}にとらわれるままに『レダロ』艦内の各所に逃げ散

りながら、意味不明の叫喚によつて艦内に混乱が拡大する上で最大限の効果を発揮した。それこそが、暗殺者……テロリストたちにとつて最も望ましい行動であることを、彼らはかけらほども認識していなかつた。

かつ、そのうちの何名かはヤンがテロのターゲットと知るやいなや最短の経路をたどつてヤンの居室へ向かつて狂奔した。彼の後を一〇名を超える『帝国軍兵士』が追尾していることなど、完全に彼の理解の外だつた。彼らが、居住区との境の気密ドアから中へ飛び込んだ瞬間、自らの肉体を複数の火箭が貫通したが、その灼熱の苦痛すら、もはや彼らの理解の外だつた。

迎え撃つたのはパトリチェフ、ブルームハルト、スール、そしてウランフの四人。この時点で、侵入者に抵抗し得たのは彼ら四名のみであり、ブリッジのルイシコフ中佐以下、艦の首脳部はなお、何が起きているかを理解し得ていなかつた。

同日二時〇四分、ユリアンたちを乗せた戦艦『ユリシーズ』ほかのヤン艦隊の救援部隊が『レダロ』を発見したとき、状況はまさに混沌の一語に尽きた。付近の宙域には破壊された同盟軍の艦艇の残骸が浮遊し、彼らを攻撃し、破壊した二隻の帝国軍重巡航艦の内、『オッフエンハイゼン』は『レダロ』に『憎しみ合う双生児のように』接舷したままだつた。既にこの時点で『レダロ』は多数の死傷者を出し、その艦内は侵入者たちによつてほぼ制圧されていたが、ヤンの生死はなお不明のままである。

「ともかくヤン提督の安全を確保するのが最優先です」

ユリアンのその判断は、後から考えれば当然すぎるほどに当然のことだつたが、アッテンボローですら、その場の混乱ぶりに幻惑され、ユリアンにそう言い切られるまで具体的な打ち手に

移れなかったほどだったのである。

『レダロ』からやや距離を置いていた『エーゲンスバッハ』が、先に『ユリシーズ』を発見した。『エーゲンスバッハ』は急速回頭するなり、斉射の閃光とともに灼熱の光の槍を『ユリシーズ』に突き刺したが、『ユリシーズ』の防禦磁場は僅かに虹色に揺らめいただけで、その攻撃を弾き返した。

「主砲斉射、目標、敵巡航艦!!」

ニルソン中佐の命令と同時に、『ユリシーズ』の放った報復の斉射はただの一撃で『エーゲンスバッハ』の防禦磁場を崩壊させ、半瞬の間を置いてその艦体を串刺しに貫く。ただの一撃で致命傷を受けた暗殺者たちの艦は、一瞬に鈍い白光の火球に包み込まれ、分子に還元して宇宙に散った。

「急速接舷、急げ!!」

シェーンコップ、ユリアン、マシユンゴを含んだ薔薇の騎士連隊一五〇名あまりを乗せた強襲揚陸艦『イストリア』が『レダロ』に強行接舷した時だった。

「中将、ユリアン、ニルソン中佐から入電。『レダロ』の反対舷側に、帝国軍の強襲揚陸艦らしきもの、さらに一隻を確認したと言っています!」

リンツ大佐の報告に、シェーンコップが血に飢えた人食い虎を思わせる表情で唸った。

「念の入ったことだ。なに、一隻が二隻だろうが、構わん。目的はヤン提督の救助、目標はヤン提督。邪魔するやつらは容赦するな。徹底的に排除しろ、同盟の軍服を着けていても手を緩めるな……まだ、何かあるのか、リンツ!」

「反対舷方向に、さらに帝国軍の戦艦見ゆ。大型の高速戦艦一、

駆逐艦二を認む」

「ニルソン中佐には僚艦をこの宙域に集合させろと言え。ほかの五隻も近くにいるはずだ。その帝国軍戦艦が不穏な動きをするようなら発砲をためらうな」

『イストリア』が『レダロ』に強行接舷し、シェーンコップ指揮する薔薇の騎士連隊が突入したのは、ユリアンが指示を発して五分後のこと。『レダロ』をほぼ制圧下に置いていた暗殺者たちだったが、数の上でも戦意・戦闘能力の上でも薔薇の騎士連隊の敵ではあり得なかった。

にも関わらず、なお状況は混沌としており、連絡網も錯綜を極めており、実際に何がおきているのかを把握するのは容易ではなかった。ヤンは容易に発見されず、ただ、居住区に累々と横たわる同盟軍と帝国軍の軍服を着けた死体を見いだすばかりだった。

最初に発見されたのはブルームハルト中佐だった。士官室の入り口近くで発見された彼は、瀕死の重傷でありながらなお息があった。

「無事ですか……ヤン提督は?」

その右手になお、柄までを赤黒く染めたトマホークを握りしめて問うブルームハルトに、シェーンコップですら絶句で答えるしかなかった。

「あの人は要領が悪いですからね。ちゃんと逃げてくれていると良いんですが……」

「ユリアンが助けに行った。大丈夫だ、すぐここへやって来るさ」

「良かった。あの人が生きていないと、これから将来、おもしろくないですからね」

声が途切れ、二度繰り返して浅いが烈しい呼吸音が漏れた。薔薇の騎士連隊^{ローゼンリッター}長代理ブルームハルト中佐が絶息したのは、シェーンコップに発見されてから五分後のことだった。

パトリチェフが倒れていたのは、士官室^{ガン・ルーム}の裏口の傍らだった。その巨体でドアそのものを塞いだのを、暗殺者たちが無理矢理に横倒しに放り出したと覺しかった。その発見状況は、捜索者たちは、死してなおパトリチェフが彼らに示そうとしたヤンの行方を察するに十分だったのである。

ユリアンが真っ先に裏口のドアから奥に飛び込み、マシンゴとリンツ、さらに数名の薔薇の騎士連隊がこれに続いた。いくらか走らぬうちに、彼らが発見した三人目はスール少佐だった。「息があるぞ。緊急救護措置だ!」

リンツに指された一人が壁面に飛びつき、戦闘艦に必ず常備されている緊急救護キットを取り出してスール少佐にとりついた。通常のメデイカルキットのほか、出血箇所の冷凍止血装置や、冷凍保存措置用薬剤までが含まれており、これで戦闘時の負傷から救われた経験のある軍人は少なくない。

「もう一人残れ、俺はヤン提督を探す。ここは任せるぞ」

「大佐、スール少佐が!!」

「な——に?」

スールが微かに腕を動かし、ある方向を指し示すのをリンツは見た。ユリアンたちの足音が、その方向に向かって急速に小さくなっていくのに、リンツは大きく頷く。

「分かった。そっちだな。任せておけ、必ずヤン提督を救い出してみせる」

ユリアンたちの姿はずいぶん遠くなっていたが、リンツに

とつて遠すぎることはなかった。最悪の凶事の予想がその胸を蝕み始めているのを感じながらも、リンツは装甲服の重量を全く感じさせない勢いで駆け出す。その途中の通路にも、そこかしこに帝国軍の軍服姿の死体が散乱しており、暗殺者たちが執拗にヤンとその護衛者……ヤンに、逃げながら追跡者を射殺できるように腕前がないことはリンツもよく心得ていた……を追いつけ、ヤンたちが必死に抵抗を続けていたことを物語っていた。

まだ果てしなく長く続く疾走を覚悟していたリンツだったが、彼の足が止まったのは、その僅か後だった。反射的に視線を落とした先で、時計^{クロノメータ}が四月一三日三時八分を示していたことが、リンツにとつての生涯忘れられぬ記憶となった。

トマホークを取り落としかけ、リンツは慌ててその柄を握り直す。知らず、両目が驚愕と不信、そして畏怖に見開かれていることにすら、リンツはまだ気づかなかった。

「うそだろ……おい。嘘だろ」

彼の声が耳に届いたのだらう。ユリアンが振り返り、小さく顎を引く。彼の傍らにはマシンゴの巨体と同行していた薔薇の騎士連隊員の姿がある。極度に照明が抑えられた通路の中で判然としなかったが、さらに数名の姿があつたが、彼らはリンツの意識の外にあつた。リンツの視界をとらえていたのは、ユリアンの目前、すでに血の海の岸と化した一角に、壁面に背をもたせかけてうずくまっている人影だった。

「おい……ユリアン、嘘だと言ってくれよ」

ユリアンから返ってきたのは沈黙だった。

「……、……」

リンツの聴覚を別の声が刺激する。聞いたことのあるような響きだが、とつさに意味がとれない。そのときになって初めて、リンツの視野はユリアンやマシユンゴと共に、壁際の人物を取り囲んでいる人影を映し出した。

一切の決着がついたのは一三日三時五分。シェーンコップと薔薇の騎士連隊隊員たちは。艦内に流れたユリアンの声に愕然として凍り付いたのだ。

『こちらユリアン・ミンツです。ヤン提督とウランフ提督、パトリチエフ中将与スール少佐、それにブルームハルト中佐を発見しました。シェーンコップ中將、すぐに『レダロ』の居住区M・〇二ブロックまで来て下さい。ヤン提督たちはそちらにおられます。リンツ大佐、マシユンゴ少尉もこちらにあります……急いで下さい』

彼らを凍り付かせたのは『無事発見』の一言がなかったことだけではなく、師父を無事に保護したと考えるにはあまりにも陰鬱に過ぎるユリアンの口調だった。彼らは一樣に最悪の事態を覚悟し、互いの目のうちに破滅の深淵をのぞき込んだかのようにこわばった表情のまま凍り付いたのである。

シェーンコップが全員退去の命令を発したのは三時三〇分。この時点で、なお『レダロ』艦内の戦闘は続いていた。暗殺者の一部が、サイオキシン麻薬中毒末期の『獣化症状』を発し、人間離れた凶暴さで戦いを継続したため、勇猛をもつてなる薔薇の騎士連隊ですら、戦いつつも後退せざるを得なくなりつつあったのだ。彼らの排除と退去のために、シェーンコップは重火

器の使用を許可したのである。

「艦体を破壊しても構わん。屍食鬼^{グール}どもを相手に時を費やすな。まとめて吹き飛ばし、生存者を守って退去せよ。この艦はこの宙域で放棄する」

可動式野戦熱線砲が搬入され、襲撃者達の立てこもる通路や居室を容赦なく灼熱の業火の中にたたき沈めた。襲撃者達の過半が消滅し、僅かな生き残りも圧倒的な火力の差にたじろぎ、後退した隙に、すべての生存者はそれぞれの艦に引き上げた。ブルームハルトやロムスキー主席らを含めた遺体もすべて収容すると、『ユリシーズ』はこの忌まわしい宙域を離れたのである。

☆★☆☆

ヤン・ウエンリー暗殺事件現場への第三の登場人物として、ジークフリード・キルヒアイス自らが『バルバロッサ』とともに現れていた事実は、長く秘匿された。帝国、および同盟……というよりも、ヤン不正規隊が継承することになる……ともに、『ユリシーズ』が『レダロ』からの離脱直後に『バルバロッサ』とコンタクトした事実を、そのの数十年にわたって封印し続けたのである。このできごとが、その後の銀河の歴史に与えた影響の大きさと、またその影響の微妙さを考えると、その場に際会した誰しもが他者に語るにためらいを覚えたのは当然のことだった。事の起こりは、四月四日、同盟首都ハイネセン・ポリスで起きたある事件だった。

その日、自由惑星同盟最後の元首であるジョアン・レベロが、執務室でどのような仕事をしていたか、記録は沈黙している。レベロのあずかり知らぬことではあるが、この日はヤンの三

四回目の誕生日だった。キルヒアイスとの会見を前に、多忙を理由に誕生パーティの類いを謝絶していたヤンだったが、その彼を訪ねてきたのは、キャゼルヌ夫人特製のケーキを携えたシャルロット・フィリス・キャゼルヌ嬢だった。

「お誕生日おめでとうございます、ヤンおじちゃま」

「おめでとうございます、ヤンおじちゃま」

シャルロット・フィリスと彼女の妹による連続攻撃に、ヤンは無然とした表情を隠しきれなかったが、彼女たちの無邪気で核心を突いた祝辞と、そしてその母親の好意には、ともかくも笑顔で謝意を示さざるを得なかった。

執務室から数千光年を隔てたイゼルローンでの、微笑ましいエピソードは、無論レベロの関知するところではない。彼にとって、彼の精神的な視野の中ではなお、自由惑星同盟は銀河帝国に對して、専制に抵抗し、市民の自由と権利を守り得る唯一の政体であり続けた。ヤンと彼の一派は、同盟政府の掲げる理想と絶対的正義に対する許しがたい叛逆者であり、同盟の尊厳と独立と引き替えに、自らの生存権を買い取ろうとする卑劣きわまりない裏切り者であった。

ロックウェル統合作戦本部長の進言……と言うよりもほぼ陰謀と呼んで差し支えない……を容れてアンドリユー・フォークを現役復帰させ、なきにも等しい中から稼働艦艇を与えてハイネセンを発たせたのも、レベロにとつては同盟元首として当然の職務だった。その是非はともかく、彼がその生涯の最後の章に至るまで、自己の職務を放擲しようとはしなかったことだけは事実であった。

ただ、レベロの主観は別に、前年九月の『ハイネセン条約』に

よつて、彼の政府はすでに命脈を絶たれている。同盟は完全に解体状態にあり、キルヒアイスの直接軍政下に置かれたケリム星区を始めとする中枢星区は、経済的にも帝国の完全支配下に入りつつあった。僅かに支配権のおよんでいるはずの惑星ハイネセンですら、事実上の無政府状態に陥り、『政府が何かを定めたとしても実行されることはない』状態となつて久しかったのである。

「すべてはヤンとその一派の責任である。彼らが同盟を守る義務を放棄し、敵前を脱走したことが、同盟政府をしてかくも惨めにして無残な敗北に直面せしめたのだ」

そう強弁し、現実のすべての状況の責任をヤンに押しつけ、彼を卑劣な逃亡者として糾弾することもできたのだが、内心はともあれ、レベロはそれを公言しようとはしなかった。先述したごとく、彼は後世において『同盟を滅ぼした政治家者』の一人としての非難を甘受することになるが、彼が主体的にそうした立場に自らを追い込んだというよりも、周囲の状況がもはや彼の処理できる範囲を遙かに超えてしまつていた結果というべきである。

「そうであれば、自らの限界を察し、たとえばヤンに膝を屈して、その協力を請う選択肢もあり得たはずである。ヤンが軍人であるという一点に拘泥し、文民統制の原則に固執しすぎた結果としての破滅的状況であり、レベロ議長がその点で批判を免れることはできない」

レベロに対するこの評論は、なお濃厚な辛辣さの彩りを帯びているとは言え、政治家としてのレベロに最も好意的な評価を与えたものと言えるだろう。激動する状況に振り回され、もとも

と乏しい権謀の才を使い果たしたレベロは、この時期『すでに住宅街の自警団以下でしかない』と評されるレベルの狭小な範囲の責務にひたすら没頭していたかのようであった。

『陰惨な雰囲気のみたよせるのを感じ』、レベロが顔を上げたとき、彼の感じた雰囲気よりもさらに陰惨な無表情さをたたえた複数の人物たちが、彼を取り囲んで銃口を向けているのに初めて気づいたのである。彼らのほとんどにレベロは面識がなかった。唯一、彼の記憶にある人物に向けて、レベロは無感動な問いを放っている。

「何用かね、ロックウエル大将。君を呼んだ覚えはないが？」

「あなたの記憶など、どうでも良いことだ。議長、問題は吾々の欲求だからだ」

内心の思いはどうあれ、ロックウエルの応答も無感動で平板なものだった。いぶかしげに視線を巡らしたレベロだったが、銃口の鈍い光が鈍磨しきったかに思われた彼の感性に不意にやすりをかけたように、一切を理解したようだった。

「……私を殺す気かね？」

かつての鋭さを取り戻したかのようなレベロの声に、ロックウエルは目を背け、無言で肯定を示した。

「理由を教えてくださいかね。現在のこの状況で、私を殺すことで、君たちが得られるものは何もないと思うが、それは私の誤解かな。私を殺したところで、帝国や、なにかんづくキルヒアイス帝国大公が諸君の功績を認めてくれるとはとても思えないのだが」
やや投げやりに腕を組み、レベロは『功績』の一言をことさらに強めて言い放った。

「君が私の首を持参したところで、キルヒアイス帝国大公は君

を殺人者として処断するだけのことだ。もはや、私と最高評議会議長なる地位にはその程度の価値しかない。それを敢えて殺すというからには、理由があるはずだと思うのは当然じゃないかね」

ロックウエルはなお沈黙を守った。彼には彼の事情があり、レベロの生命を奪うべき正当な理由を持つてこの場に現れたのである。少なくとも、彼は自分が主体的な判断に基づいて、この挙に出たことを信じていたのだが、居住まいを正したレベロ議長の眼光を前に、にわかにその確信が揺らぐのを感じていた。

レベロという政治家の、報われることのなかった責任感と良心に対して、何者かが哀惜して、その死の直前に可能な限りの恩寵を与えたのかも知れない……レベロの死にあたって『正史』はそう語っている。同時代と後世からの不本意極まりない批判を浴び続けることになり、今も不当な死を与えられようとしている自由惑星同盟最後の元首の前に、ロックウエルは射撃の命令を発することができず、しばしの間、呆然と硬直していた。

「ヤンがキルヒアイス帝国大公と和平交渉を開始する。これを許してはならない。レベロ議長を暗殺して同盟領の混乱に拍車をかけ、帝国大公を対応に暇いしまなからしめるのだ。そうすれば、貴官は篤く報いられ、かつての地位を再びすることも叶うだろう」

そう確信しての行動だったはずであり、既に最高権力者としての実権も失い、無力な文官の一人でしかないレベロを抹殺するだけのことであったはずだった。ロックウエルは自身のみならず、周囲の仲間全員から動揺と狼狽かげろうの陽炎が揺らめき立つのを感じた。自分が何をしているのか、自身の意思によって行動し

ているのかすら曖昧になる中、ロックウエルはかううじて口を開閉させた。濃霧の中のように一切が輪郭を失っていた視野がようやく正常な機能を取り戻したとき、ロックウエルは、レベロが複数の射線に身体を貫かれ、椅子からフロアに崩れ落ちるのを見た。

……レベロを暗殺することで、キルヒアイスをして混乱の対応に忙殺させる。ロックウエルが妄想の中で認識していた目的は、ある程度まで現実のものとなった。レベロ暗殺の報告を受けたキルヒアイスは、ただちにウルヴァシー駐留艦隊をバーラト星系に派遣、地上部隊に同^{ハイネセン・ボリス}盟首都を制圧させると共に、旧同盟政府の要人全員を一挙に拘束した。容疑は『ハイネセン条約』に対する背反。いわゆる『キルヒアイスの草刈り』と呼ばれる、およそ彼らからぬ軍事的弾圧作戦というべきで、拘束され、ラグプール刑務所に収容された旧同盟政府要人は実に五〇〇〇人の余を数えることになる。

さらにキルヒアイスの参謀長ベルゲングリューンを驚かせたのは、これら政治犯に対するキルヒアイスの扱いだった。

「このようなことをして、本当に宜しいのですか？」

思わずベルゲングリューンが反問したほど、キルヒアイスの指示は峻厳なものだった。全員に対して帝国軍憲兵隊による尋問を実施。場合により自白剤の使用も可とする。尋問は向こう一週間以内に完了させ、その中から特にフェザーン、および地球教団との関係についての供述を整理して報告すること。同時に、自由惑星同盟の滅亡を宣言し、バーラト星系を含む最後の自由惑星同盟領の帝国への完全併吞を宣言するとともに、旧同盟政府の未償還の国債は、これを旧同盟政府資産を原資として、不足す

る分は帝国政府が保証を与えることで、一定の比率においての償還を保証する。

「……以上、帝国大公ジークフリード・キルヒアイスの名において、直ちに宣布して下さい」

「……しかし、政治犯の処置はともかく……^{カイザー}皇帝陛下の御裁可なしに旧同盟の国債償還保証を宣告するのは明らかな越権行為と見做されかねません」

「それは分かっています」

ベルゲングリューンの指摘に、キルヒアイスも苦しげに顔をゆがめざるを得なかった。

「陛下がご健康であればわたしもこんなことはしません。しかし、今の状況で陛下の御裁可が下りるのがいつになるか予想できません。時を移せば、同盟の国債は暴落するでしょうし、それが引き金になって帝国国内にまで混乱が波及する可能性……と言うより、これはリヒター財務尚書の指摘の通り、一〇〇パーセント波及するものと見る必要があります」

ラインハルトの登極で一挙に好転した帝国の経済状態と一般民衆の生活状態。ローエングラム王朝に対する民衆の支持基盤はそこにある。これが、同盟の滅亡をきっかけとして経済恐慌に転じるようなことがあれば、民衆の怨嗟の矛先は必ずや玉座を向く。かつてヤン・ウェンリーは言わなかったか、自らに政治の権利も責任も持たない民衆は、気楽に権力者の批判のできる立場をこそ好む——と。

「越権を責められるのであれば、わたしが陛下に直にお詫びします。今は、混乱を避けるのが最優先です。陛下の御不例でわたしが判断を迷い、目前の混乱の弥縫策のみに奔走する。彼ら、がレ

ベロ議長を暗殺させた目的は、おそらくはそれでしょう」

ベルゲングリューンは驚きに目を瞠って、この大人しやかな青年を見つめた。

「では閣下は、このロックウエル大將は単なる傀儡だとお考えですか？」

「そうです」

静かな確信を込め、キルヒアイスは頷く。コンソールを操作し、表示させた一連の文章を、キルヒアイスは信頼する部下に示した。スクリーンをのぞき込んだベルゲングリューンの翠色の瞳が驚きと不信に丸くなった。

「これは……？」

「これが、いわゆるシュミットバウアー文書です。歴代のシュミットバウアー家当主、そうですね晴眼帝の時代からコルネリアス二世くらいまでの時代の当主たちが代々書き継いできた手記だと言うことです」

「しかし、シュミットバウアー文書なるものは、発見されてすぐにテロに遭い、すべて失われたと聞いております」

「公式発表はそうです」

連日の激務に疲労の色の濃い顔に、キルヒアイスは微かに悪戯っぽい苦笑を浮かべて見せた。原本の文書は失われたが、その電子的なコピーは無事にキルヒアイスの手に渡り、帝国中史の権威たるローゼンマイヤー教授による厳密な分析の対象となった。膨大な手記のすべてが分析し終わったわけではないが、解明の終わった部分はキルヒアイスの手許へ送られてきている。

「それが、これです。語られているのはマンフレート二世、亡命帝の時代です。ローゼンマイヤー教授に特にお願いして、この部

分を最優先に分析していただきました。文書の他の部分との参照から、事実として認定できる箇所と、推測の域を超えない箇所を塗り分けてもらっています」

「では……では……」

ベルゲングリューンは『事実』として列挙された数十の項目に目を走らせてから、何度かつばを飲み込んだ。『敗軍帝』に始まり、その後、『百日帝』、『晴眼帝』さらに『亡命帝』。決して帝国中史に通じているとは言いがたいベルゲングリューンにも、それら皇帝の名は耳に親しいものだった。

「これらの皇帝を暗殺の標的とした……この、何とか言う組織がまだ生き残っていると……」

言い止し、ベルゲングリューンは息をのむ。

「まさか、閣下？」

「ええ。彼らは単独の存在ではない。彼らを後援した組織があります。銀河帝国の皇帝の生命をすら左右できるほどの巨大な組織を、自由惑星同盟以外に選ぶとすれば、選択肢はいくつもあります」

感じの良い青い目。その双眸が陰しすぎる光を伴ってスクリーンを薙ぐのをベルゲングリューンは確かに見た。姿勢を正し、上官の命を肯う旨を伝える。

「ただちにかかります！」

キルヒアイスの名による自由惑星同盟の滅亡とバーラト星系を含む最後の自由惑星同盟領の帝国への完全併吞が宣言されたのは四月一〇日。奇しくもヤンがキルヒアイスと会見すべくイゼルローンを発した日である。皇帝^{カイザー}ラインハルトの裁可を得ずに発せられたにもかからず、この命令は『新帝国暦二年四月一

○日の勅令』……さらに、宣言を発するためにウルヴァシー駐留部隊が本部を置いた同盟国立美術館の冬バラ園の敷地であったことから、『冬バラ園の勅令』と通称されるに至る。命令の正当性と、勅命ならざる命令を勅命と呼んだことについては、後日において大きな議論を呼ぶことになるのだが、滅亡を宣告された人々にとつては、それが勅令であろうと、キルヒアイスの独断の命令であろうといささかの差異もあらうはずはなかった。滅亡は滅亡、併呑は併呑なのである。

キルヒアイスにとつての待望の報告の第一報がもたらされたのは四月一二日。おそらくはボリス・コーネフがその情報を得たのと同じ情報源からの報告に違いなく、その内容はさしものキルヒアイスの想像をすら超えていた。一読するなり、キルヒアイスは報告をもたらした当のベルゲングリューンに向かって叫ぶと同時に席を蹴っていた。

「ただちにガイエスブルグを出ます。同行して下さい」

『バルバロッサ』がわずか二隻の駆逐艦を従えたのみでガイエスブルグ要塞宇宙港を出港したのは、その日の深夜。無論、帝国軍のいかなる公式記録もこの出航を記録していない。極秘の内の出撃だった。

『バルバロッサ』が『レダロ』と、『レダロ』に接近する二隻の帝国軍巡航艦を探知したのは四月一三日一時二五分。『ユリシーズ』が同宙域に達するのに先んじること半時間強のことだった。ユリアンらの『イストリア』、暗殺者たちの『オッフエンハイゼン』に加えて『レダロ』に接舷していたのが『バルバロッサ』搭載の揚陸艦に他ならなかったのである。

『バルバロッサ』とキルヒアイスの介入が公然の事実となつ

てからも、キルヒアイス自らがこの揚陸艦を率いて『レダロ』に移乗していた事実は長く極秘とされ、『バルバロッサ』と『ユリシーズ』の邂逅も偶然の産物として処理されるのが普通である。事実としては、キルヒアイス率いる『真物の』帝国軍陸戦隊は、暗殺者たちに遅れること一〇分足らずで『レダロ』艦内に突入しており、その先頭に立っていたのが他ならぬキルヒアイスその人だった。そして、ヤンの姿を発見するのにもかかわらずにユリアンよりも早かった。

「発見！ 同盟軍元帥、および大将の階級章着用男性二名！」「救助!!」

おびただしい流血の中に座している二人分の人影を発見し、キルヒアイスが生死の確認と治療の準備を命じた瞬間、キルヒアイスは凄まじい殺気を感じて戦斧トモホウを振り上げた。

甲高い金属音とともに華々しい火花を散らして、薄暗い通路を照らし出した。電撃の勢いで襲いかかる斬撃を、キルヒアイスはことごとく交わしたが、彼ほどの白兵の技量を持つても装甲服の表面に幾筋から亀裂を穿たれたほどに、襲撃者の突進と跳躍と斬撃は恐るべき剽悍さに満ちていた。

「ユリアン、その人は違う!!」

耳を劈くつぎ金属的な叫喚に混じって響いた同盟公用語の叫びが、キルヒアイスに襲撃者の正体に思い当たるきつかけを与えた。

「待て！ わたしは敵ではない」

キルヒアイスの口からも同盟公用語が迸る。真つ向からたたき下ろされた一撃を、間一髪、水平に構えたトマホークで受け止め、同時にシールドを外し、ヘルメットを後ろに投げ捨てる。タ

イミング良く、誰かがハンドライトの光束を彼の横顔に当て、鮮やかな赤毛を闇の中に浮かび上がらせた。

「ジークフリード・キルヒアイス……帝国大公？」

襲撃者の斬撃が止まった。

まだ少年と言って良い若さを残した声が、こちらはややぎこちない発音の帝国公用語の問いを発するの、キルヒアイスは小さく笑って見せた。

「ユリアン……この人ですか？」

慌てたように襲撃者がヘルメットを外した。

「ユリアン・ミンツ同盟軍大尉……です、帝国大公」

「ああ、君でしたか……！」

キルヒアイスもまた、四年前に一度だけ言葉を交わしたヤンの被保護者のことを覚えていた。

「久闊を叙したいところですが、今はそれにふさわしい場所でもなければ時でもありません。善後策を協議したい。同盟……いえ、ヤン艦隊の代表者と……つまり、ヤン・ウエンリー・提督以外での、という意味ですが」

キルヒアイスの言葉にユリアンの形相が変わった。崩れるように膝をつき、装甲服が深紅に彩られるのも無視して、血の泥濘の中に這い寄る。

「ヤン提督、ヤン提督、返事を、返事をして下さいっ!!」

肩に置かれた手を、ユリアンが乱暴な仕草で振り払うのに、キルヒアイスもまた膝をつく。その両肩に手を置き、耳元でなにごとかを叫んだ。電撃を受けて痙攣するように振り返ったユリアンの目が、キルヒアイスを至近からとらえた。

「そんなことが……!!」

「ですから、代表者と話させて下さい。時間がありません。急ぎ、処置を進めなければなりませんし、それについてはヤン艦隊の同意が必要です。ヤン・提督ご自身の同意を得られる状況ではないのですから」

感情が理性に席を譲り、火を噴くかのような怒りと復讐の衝動が沈静化して周囲を見回す余裕を得るまでに、時計の秒針が半周するほどの時間が必要だった。その間に遅れていたリンツが駆け寄ってきて、歴戦の勇者たる彼ですら立ち竦むほどの惨状に息を呑んで絶句するのが見えた。

大きく息をつき、ユリアンはもう一度キルヒアイスを正面から見た。

「分かりました。僕……いえ、私が、この場でのヤン艦隊の代表となります。ヤン艦隊の代表者として、帝国大公、あなたのお申し入れに同意します」

「良いのですね？」

「ええ」

斜め下に落とした視線を、ユリアンはそのまま動かさなかった。

「ヤン提督もそれを認めて下さると信じます。ただ、お約束下さい、帝国大公。必ず、提督をイゼルローンへお返し下さると。ヤン提督が還られる場所はイゼルローンしかありません」

「宜しいでしょう。皇帝^{カイザー}ラインハルト陛下の名において、お約束します」

この時のユリアンとキルヒアイスの交わした約束が、『ガイエスブルグの盟約』……それが結ばれた場所を考えるなら『レダロ』の盟約と呼ぶべきだろうが……が結ばれるに至る端緒と

なつた。

『レダロ』を除く、『ユリシーズ』以下の艦艇群がイゼルローンへ帰り着いたのは、四月二五日。事件から二週間を経過してのことであるが、本来数日を経ずしてイゼルローンに帰還するはずの『ユリシーズ』が、一〇日あまりの時間をどこで費やしていたかについても、一切の公式記録が沈黙を守っている。

数十年後、公表された公式文書の矛盾に気づいた史家や研究者が矛盾の淵源をたどり始め、ついにはキルヒアイスの行動と『ガイエスブルグの盟約』に至る経緯が明らかにされるのだが、それは後日の物語である。この時点において、より重要な事実は、五月五日一九時一〇分、エル・ファシル臨時革命政府とヤン・イレギュラーズ不正規隊の名において公表された、『ヤン・ウエンリー元帥死去』の公式発表である。

「去る宇宙暦八〇一年四月一三日未明、帝国軍キルヒアイス帝国大公との会見会場への航行途上にあつたヤン・ウエンリー元帥一行は、途中、同盟軍と帝国軍を僭称する複数の戦闘艦艇の襲撃を受けた。元帥は二三時三時五分に、銃創からの失血による心肺停止状態で発見され、その後、加療による回復不可能と判断された。同行者のパトリチエフ中將、およびブルームハルト中佐も遺体で発見された。スール少佐は救出されたものの複数の銃創により意識不明状態で加療中である。本事件はただちに帝国軍のキルヒアイス帝国大公にも伝えられ、現在、エル・ファシル臨時革命政府は帝国軍と協力し、襲撃者の正体究明にあたつてい

この一報は宇宙を震撼させ、ヤンの味方には絶望を、彼の敵手には失望、そして彼の敵手たるを密かに自負する一握りの人々には歓喜と安堵を与えた……が、人々がこの訃報の意味を理解し、その影響の及ぶ先に思惟を巡らし始めるだけの時を、まさに時の流れそのものが与えなかった。引き続き激震が、今度は帝国を襲い、人々は天の彼らに時を与えることへの余りの吝嗇さに眉をひそめざるを得なかったのだ。

曰く、『ロイエンタール元帥に叛意あり』。

皇帝ラインハルト不在の中、事実上、帝国軍の総帥として新帝都フェザーンに君臨するオスカー・フォン・ロイエンタール元帥。意図してのことか、あるいは単なる偶然のできごとなのか。

告発者が、彼をして皇帝^{カイザー}に対する篡奪者として糾弾する声を上げたとき、奇しくもその声はヤン・ウエンリーの訃報を伝える声と重なつたのである。

第三章 祭りの後

「二〇〇〇万の足を止めた一通」

後に、そう評されるに至る報告書がオーデインにもたらされたのは、新帝国暦二年五月のことである。

この時期、ローエングラム王朝の帝都はフェザーンと定められ、オーデインは旧帝都と呼ばれることが既に定められている。

『回廊の戦い』の前、皇帝ラインハルトは、その玉座をフェザーンへ移しており、フェザーンの高級ホテルであるホテル・バルトアンデルスに仮皇宮を置いたことは広く知られている。『回廊の戦い』の間も、シルヴァーベルヒ工務尚書の主導下、新帝都の建設は始められており、新王朝の皇宮となるべき『獅子の泉宮』も敷地の選定と設計がすでに着手されていた。ただ、皇宮をはじめとして帝国統治の中核となるべき官衙街の完成は、まだ未来に属すべきことであり、当面は旧フェザーン自治府の官庁街の流用、ホテルや富裕な商人の別邸などの借り上げなどに頼らざるを得ない状況が続いていたのだが。それでも、ラインハルトの遷座にともない、主要閣僚とその下僚たるべき膨大な数の官僚群を中心とした帝国の統治組織は、フェザーンへの移動を開始しつつあった。

その一方、皇帝ラインハルトが『ブリュンヒルト』とともに旧帝都に病中の身を養わざるを得なくなったため、帝国軍の主力はなお旧帝都にあった。帝国軍の双壁たるロイエンタール、

ミッターマイヤーの両元帥をはじめとして、将帥の多くは彼らの皇帝とともに旧帝都に居を置くことを望んだが、これはラインハルト自身が許さなかった。

「予が健康体であり、自ら治世の実を上げ得るならば、それも良からうが、今は予自らが統治に当たり得る状態ではない。統治の中核と軍事の中核が異なる地にあるがままに放置しては、新都を定め、遷都した意味がない。かつ、同盟が完全滅亡し、帝国の新領土となった今、オーデインでは帝国領全域を併せ統治するに、旧帝国に偏りすぎる。予と共に卿らが旧帝都にとどまるのでは、キルヒアイスを初めとする派遣軍をいつまでも旧同盟領に置き続けねばならぬではないか」

バウアーシュミット医師による本格的な治療開始に先立ち、ラインハルトは自ら勅命を下し、ロイエンタールに軍主力を率いてのフェザーン移動を命じたのである。移動開始は五月五日と定められ、ルッツ上級大將が副司令官としてロイエンタールに従う。ルッツのほか、ロイエンタールの指揮下に入ったのはクナツプシュタイン、グリルバルツアー、アルトリンゲン、ブラウヒツチの五名の大将である。加えてウルヴァシーのシュタインメッツも、駐留艦隊司令官の任を解かれ、フェザーンへ帰還すべき旨が伝えられた。

ロイエンタール隷下となった兵力は、ラインハルト自身の意思もあり、思い切つて巨大なものとなった。戦闘艦艇八万隻、補助艦艇三万隻を数え、兵員総数は約二〇〇〇万に達する。

宇宙艦隊司令長官たるミッターマイヤー元帥もロイエンタールとともにフェザーンへ移動する予定だったが、イゼルローン方面を含めた帝国本土内の兵力配備を調整する必要があり、宇

宙艦隊総司令部がその総帥とともにフェザーンへ赴くのは、ロイエンタールに遅れること半年後とされた。ミッターマイヤーの指揮下に、ワーレンが影の城要塞の修復と守備を命じられ、メックリンガーが旧帝都を中心とする帝国土の治安維持部隊の指揮を委ねられた。憲兵総監部は、新旧両帝都の警備に責任を負うことになり、さりあたりケスラーはオーデインに身を置くことになる。

軍務尚書オーベルシュタイン元帥も皇帝の傍らに残留を希望するのではないかと見る向きもあったが、義眼の元帥は『軍令の中枢が移る以上、軍政の中枢もまたそれに同行せねばなるまい』として、ロイエンタールとともにフェザーンへの移動を表明した。

「別に一緒に来てくれと頼んだ覚えはない」

幾つかの史書は、オーベルシュタインの意思表示に対して、ロイエンタールがそう吐き捨てたと伝えるが、実のところ、それを裏付ける証言や記録は残されていない。

「近くにいられるのは気に食わないが、あのオーベルシュタインが陛下のお側に侍する姿を想像するのはもつと業腹なんだろう」

ミッターマイヤーの四天王の一人と言われたバイエルラインは、ミッターマイヤー自身がロイエンタールの心情を忖度して語ったとする言葉を伝えており、これが転じて前述のロイエンタールの言行として記録されるに至ったものだろう。

司法尚書ブルックドルフによるロイエンタールへの告発の経緯は『正史』に語られる通りであるので、ここでは詳細を省く。

帝国政府と帝国軍内部の綱紀粛正と、軍に対する司法の優越確立を望んだブルックドルフは、ラングからの通牒によってロイエンタールの愛人エルフリーデの存在を突き止めたのである。彼女が故りヒテンラーデ侯爵に連なる一族であること、さらには彼女の一家に対する流刑に対しては恩赦も減免も与えられていないことを知った司法尚書は、おりからウィリアム・オーディッツがフェザーンで吹聴した『ロイエンタール元帥に不穩の気配あり』なる流言の内容をそのまま借りる形で、ロイエンタールへの告発状を認めたのである。

「ロイエンタール提督は元帥の地位にあり、大逆罪以外では刑法によつて処罰されることはない。しかしながら、国事犯の一族たる女を愛人として自邸に住ませ、あまつさえ、その女はロイエンタールの子を懐妊してさえている。この事実を看過することはできない」

司法省の取り調べに対して、エルフリーデはロイエンタールとの関係と妊娠の事実を認めた上、懐妊を告げた彼女にロイエンタールが応じた言葉まで供述したことはあまりによく知られた事実である。

「この子のために、さらに高処を目指そう」

ブルックドルフは言う。

「既にして元帥、統帥本部総長、さらには皇帝陛下の代行者として帝国軍の過半の兵力と共に新都に向かわんとする人物が、何をさしてさらなる高処と称するか。単なる言葉の綾ととれぬこ

とはないとしても、覇氣の余りの揚言として無視するには余りにも矯激に過ぎる。よろしく、その真意を糺すべきである」

報告書がオーベルシュタインとラングの連名だけであれば、ヒルダは皇帝秘書官としての権限の許に、これを却下しただろう。だが、司法尚書ブルックドルフからの報告書とあれば、これをむげに退けることは彼女にもできることではなかった。それでも、報告書の告発する当の相手が相手であり、彼女が皇帝^{カイザー}への報告をためらったのは当然のことだった。また、すでにパウアーシュミット医師による治療の第一段階が開始されていたことが、彼女のためらいを大きくする最大の理由だった。

「最も危険な段階です。皇帝陛下には可能な限りの安静を保っていたかなければなりません」

ラインハルトの病室は、一部の閣僚や医療関係者の主張を退^{ノイエ・サンスト}けて新無憂宮の南苑に設けられている。ラインハルトが、その療養期間を過ごすべき無菌治療室と病室、パウアーシュミット医師をはじめとする医療スタッフの詰める研究棟などが新たに設けられ、それらを厳重な警備棟が取り囲んでいる。

一度はフロイデンの山荘に戻っていたアンネローゼもまた、南苑に戻っている。パウアーシュミットから治療の内容と、彼女自身の健康に対するリスクの説明を受けたアンネローゼは、一瞬の逡巡も見せなかった。

「よろしいですわ、ドクトル。あなたが良いと思われることをなさって下さい。それがラインハルトの生命を救うことに繋るなら」

ラインハルトの治療と並行して、アンネローゼもまた病室の一室に身を置いて、治療の第二段階に向けての検査を受けてい

るところだった。

治療が開始されてのことについては、ラインハルト自身が『当面、民政は國務尚書ほかの閣僚に、軍務はロイエンタール、オーベルシュタイン、ミッターマイヤーの三長官の手に委ねる。キルヒアイス帰還後は、彼に国政全体を統括せしめよ』との勅令を発しており、ブルックドルフの報告書は当然、國務として内閣で処理すべきところだった。

「ことは統帥本部総長に対する告発であり、新帝都への軍務中枢移動を直前に控えた時期である。皇帝陛下のご親裁が必要である」

ブルックドルフを含めた、それが内閣での結論であり、ヒルダはため息をつかずにはいられなかった。ことはロイエンタールに対する大逆の疑惑であり、キルヒアイスも不在である以上、彼への告発を裁定し得る存在があるとすれば、やはり皇帝^{カイザー}ラインハルト以外は考えられない。内閣……ひいては國務尚書たる父マリーンドルフ伯の苦衷は当然のこととヒルダには受け取られた。

ヒルダが皇帝首席秘書官の執務室を出たのは、内閣での裁決結果を受けて半時間ほど経過してからのことだった。この時点でも、なお彼女には大きな迷いがある。信頼する重臣に対する告発である。虚報であったとしても、その内容がラインハルトの心身に打撃となって現れてくるのではないか。パウアーシュミットからの報告でも、ラインハルトの容態は非常に微妙な段階にあった。

急速に悪化しつつある血管炎や内臓炎の症状を一時的に抑えつつ、免疫機構の抑制を進めていくのは、パウアーシュミット自

身の言葉を借りるなら『最も困難な脳外科手術以上の難事』だったのである。ラインハルト自身の意識は明晰を保っているのだが、進行中の病に加えて治療自体が心身に大きすぎる負荷をかけている。戦場での覇気を、今のラインハルトに期待するのは難しくかった。

「これが……キルヒアイス提督が案じられたことだったのね」

皇帝専制のもたらす、皇帝自身への過度の負荷。それをキルヒアイスは常に案じていた。重すぎる負荷から来る疲労や疲労感が精神の荒廃を呼び、名君として即位した帝王を暴君として終焉させる。無数の君主がたどった轍からラインハルトを免れさせるべく、キルヒアイスは帝国の新たな統治機構の研究に力を注いできた。だが、それが形となり、ラインハルトの双肩にのみかかる巨大な統治の負荷を取り除く前に、病魔がラインハルトを病臥させ、彼を代行すべきキルヒアイスは遠く自由惑星同盟の地を離れることができない。重病の床にあつてなお、ラインハルトは皇帝としての義務を負わねばならず、しかも、彼がそれを逃れようとしないうちに、ヒルダの理解は理性と言うより、感情に由来した。

「予の皇妃となつてくれ、フロイライン・マリィンドルフ……予にとつて皇妃とは部下ではない。予の、生涯をともしする伴侶なのだ」

ラインハルトのその言葉が、胸の内に暖かな光を灯していることをヒルダは自覚する。それはラインハルトへの無条件の信頼となつて彼女を支えると同時に、その病状への、ともすれば足許に揺らぎをさえ覚えさせるほどの懸念となつてのしかかつてくるようだった。

セキュリティチェックを抜け、病棟区画に入った一角に、一人の女性が佇立していた。ヒルダを認め、軽く会釈する。女性としてはやや長身の部類に属する。薄い色の金髪をアップにして、医療スタッフの服装を身につけている。ただし、腰に帯びた小型の熱線銃^{ブラスタ}が、彼女がただの医療スタッフではないことを物語っていた。

「陛下のご様子は？」

「起きておられる。陛下へのご報告か？」

なめらかな帝国公用語だが、トーンはわずかにぎこちない。彼女の素性を思いだし、ヒルダは僅かに顎を引いた。

「ええ、かなり重大な。内容は……」

「内容を聞かせてもらう必要はない。妾……ではなかった、私は陛下のそば仕えであり、護衛の一人と言うに過ぎないから」

研磨された紫水晶^{アメシスト}を思わせる双眸が、歴戦の軍人にふさわしく剣呑さを隠していない。ただ、それが敵意を示すものではないことはすでにヒルダも知っていた。

「戦場に出続けている内に、こんな目になってしまった。直しようもないから許してほしい」

そう言われたのは、初対面の時である。三〇〇〇余家とは言え、帝都の貴族社会はそれほどには広くない。ヘルクスハイマー伯爵令嬢マルガレータは、ヒルダから見れば同じ学校の後輩に当たる。面識はなかったが知らぬ名ではなかったし、ラインハルトやキルヒアイスと因縁浅からぬ身であることも聞かされている。マルガレータ……言うまでもなくグレーチェン・ヘルクスハイムその人である。『回廊の戦い』で捕虜となり、病床に伏すライン

ハルトと、さらにはアンネローゼのそば仕え・兼・用心棒……これはグレーチエン自身のやや自嘲気味な述懐による……となった経緯は先に述べた。

「陛下はあなたのことを？」

「覚えておられた。同盟でどのように過ごしてきたかのお尋ねを受けて……長い話になってしまうので、ご健康を回復されれば、その後でお話しすると申し上げた」

知らない人間が聞けば怒りを孕んでいるのではないかと思えるほどに素っ気なく、ぶっきらぼうと言つて良い口調だったが、別に隔意あつてのことではない。ヒルダも十分に心得ている。

ラインハルトと直接会うことはできない。グレーチエンに伴われて入った部屋の正面に設えられた大型のスクリーンに、ラインハルトの姿があつた。わざとそう調整されているのかも知れないが、ベッドの上に半身を起こしたラインハルトの像は解像度が粗く、白茶けていて現実感覚を欠くものだった。

『ロイエンタールについての報告があると聞いた……待て、ヘルクスハイム』

一礼して踵を返したグレーチエンの背にラインハルトの声が飛ぶ。やや低かつたが、声量と口調がかつてのラインハルトに変わらぬことを確認し、ヒルダは密かに安堵の息をついた。

『退出するには及ばぬ。いずれ知れることだ』

グレーチエンは微かに眉をひそめたが、それなり何も言わず、部屋の隅に退いて佇立した。

「さきほど報告書を転送いたしました。かいつまんでご説明いたします」

ヒルダの説明を、ラインハルトは微かに眉をひそめて聞き

入つていた。内閣が判断を彼に預け、さらにはロイエンタールに対する弾劾の権限がブルックドルフからラングの手に移されたという下りになると、にわかにはその目が險しさを増した。

「……ミッターマイヤー元帥からは意見書が提出されております。報告書は一方的に過ぎる。ロイエンタール元帥に自ら釈明の機会を与えるべき、と」

『軍務尚書の意見は？』

「特にございません。報告書に名を連ねる以上、言うべきことはその中で尽くしている、とのことでした」

小さく頷き、考えをまとめようとするかのようにラインハルトはつかの間、目を閉じた。

不意にヒルダは、突き上げてきた不安に胸を衝かれ、スクリーンに向かって一步を踏み出した。指先にスクリーンの硬質な感触があり、ヒルダは彼女とラインハルトを遮る不可侵の障壁の存在に唇を噛みしめた。

「陛下！」

蒼氷色の双眸が開かれ、驚きをたたえて瞬くのが見えた。

『どうした、フロイライン。そんな悲劇的な声は、あなたには似合わないな。そんな声を出されると、予の生命が旦夕に迫ったのではないかと錯覚してしまうではないか』

「あ……も、申し訳……ございません」

目を閉じたラインハルトの姿が一瞬に生氣を失い、生命の通わぬ彫像のように見えたのだ。

『案ずるな、フロイライン。予は治る。治つて、あなたを皇妃に迎えるまではヴァルハラ門をくぐるわけにはいかぬ……そうだ、ロイエンタールのことだが』

微かな苦笑が端麗な頬をかすめた。ヒルダも慌てて姿勢を正し、皇帝^{カイザー}の言葉を受ける。

『ミッターマイヤーの言を良しとする。ロイエンタールのもとにはメックリンガーを派し、礼をもって事情を聴取せよ。内務省、あるいは内国安全保障局による取り調べは許さぬ。ラングには差し出た真似をするなど申し伝えるがよい』

「承りました、陛下」

『しかる後、ロイエンタールをこの場へ呼び、直接に釈明を聞く。国務尚書、国務次官、および司法尚書。これに加え、旧帝都^{オールドイン}に駐在する上級大将以上を同席させるよう準備を整えよ。日程の調整はお願いする、フロイライン』

「ご命令、確かに承りました」

領き、ラインハルトは柔らかな微笑を浮かべた。

『この後、治療措置が待っている。楽なものではないが、受けねばならぬものを拒むつもりはない』

皇帝と言うより、悪戯を見つけた悪童の表情に似ていたかも知れない。ラインハルトは鼻の頭にしわを寄せるような、ちよつといやそうな表情をして見せた。それを退出のサインと見て取って、ヒルダは深々と一揖し、身を巡らした。

その背を、ラインハルトの声が追った。

『心配をかけて済まない……フロイライン……いや、ヒルダ』

「……陛下!？」

不意打ちに頬が熱く染まるのを感じてヒルダが振り返ったとき、ラインハルトは再び悪戯っぽい表情に戻って軽く右手を挙げ、そこで映像が切れた。

小さな笑い声が部屋の隅から聞こえ、ヒルダはまだ頬を真っ

赤にしたまま、彼女を見つめている紫水晶^{アメジスト}の目を睨み付けた。

「聞いていたのですか!？」

咎める響きを帯びた言葉は、ストレートに弾き返された。

「愛されてるのね♡」

ヒルダは絶句し、二の句を継げなかった。

『二〇〇〇万の足を止めた一通』は、確かにロイエンタール麾下に新帝都へ移るべく準備を整えた帝国軍二〇〇〇万将兵を旧帝都^{オールドイン}に足止めしたのであるが、史実の語るとおり、足止めが長く続くことはなかった。

五月五日、本来なら新帝都への進発を予定された日、ロイエンタールはメックリンガーの訪問を受け、新無憂宮^{ノイエ・サンズーシ}への出頭を求められた。ちょうど朝食中であつたロイエンタールはメックリンガーの言葉にも動揺は示さず、畏敬すべき僚友に対してコーヒートの相伴を勧めた。供されたコーヒートをメックリンガーが賞味し終わると、ロイエンタールは出頭に応じる旨を伝え、ともに新無憂宮^{ノイエ・サンズーシ}に向かう車中の人となった。

ロイエンタールに対する審問は数日に及んだが、審問に携わったのはメックリンガーとケスラーであり、ラインハルト自身の指示通りに内国安全保障局は完全に蚊帳の外に置かれた。ラングは最初は軍務尚書、それから司法尚書に対して、『ロイエンタール元帥に不穩の意を見いだしたのは内国安全保障局の功績である』として審問への参加を要求した。

オーベルシュタインは冷然としてラングの主張を無視し、

ラングの詐術に陥るがまさに告発者として名を利用されたことを察していたブルックドルフもまた、ラングの主張に対して『笑止』の一言で応じただけだった。その後もラングは國務尚書に対しても同じ主張を繰り返したが、『内国安全保障局を審問に参加させてはならぬとは、陛下からの御詔である』と告げられると、さすがに無駄を察しての沈黙に陥った。

皇帝^{カイザー}ラインハルトによるロイエンタールへの審問が行われたのは五月一七日。場所は新無憂宮^{ノイエ・サンクトン}南苑の一角、通称『晴眼帝のサロン』と呼ばれるホールだった。

『晴眼帝のサロン』は、その名の通り、晴眼帝マクシミリアン・ヨーゼフ二世が、皇后ジークリンデやミュンツアー司法尚書ら少数の側近との議論に時を移したとの伝説が残る、サロンというよりもホールである。帝国中興の祖と讃えられる名君への敬意からか、室内の調度は注意深く維持・補修され、一五〇年前そのままの姿を保っていた。

出席者の数に比較して座席の数が著しく少なかったため、彼らの多くは他の部屋から運び込むことになった。彼らは思い思いの位置に自ら運び込んだ座席に着き、スクリーン越しに行われる皇帝^{カイザー}とロイエンタールの対話に目を凝らすことになった。

病室のラインハルトを等身大に映し出すスクリーンの中、最も困難な段階にあるとされる治療のただ中にある彼らの皇帝^{カイザー}の顔色は決して良いとは言えず、表情にも疲労と憔悴の色が濃く、重臣たちに懸念と心痛の吐息をつかせるに十分だった。

『ロイエンタール元帥』

スクリーンを通して響き渡ったラインハルトの声は、しかし、

覇者としての力強さと覇気を失っておらず、一同を安堵させると同時に瞠目させた。ラインハルトがロイエンタールの愛人エルフリーデに関する経緯を問い、それに対してロイエンタールが応じたのは『正史』の記す通りであり、ミッターマイヤーが友人を案ずる余りに審問に割って入り、皇帝^{カイザー}自身にたしなめられたのも史実の語る通りの出来事である。

『……予がまだローエングラムの家名を継がぬ頃、予は卿からの忠誠を誓約されたことがあつたな……』

審問を結ぶ問いとしてラインハルトの放った言葉も余りに有名である。

『卿は、あの夜のことを覚えているか？』

「忘れたことはございません、陛下。一日といえども……」

超高温の恒星光を思わせる蒼氷色の視線を受ける金銀妖瞳^{ヘテロクロミア}に、欠片ほどの曇りも逡巡もなかった。事実、ロイエンタールは自身の皇帝^{カイザー}に対する忠誠に一点の疑問も抱いていなかったし、かつて信じてもいたのだ。我が忠誠は皇帝^{カイザー}ラインハルトにこそあり、他の何者をしても代替すべからざるものであると。帝国大公キルヒアイスが皇帝の代行者として、彼の上位に即いたとしても、異を立てるつもりもなかった。キルヒアイスが代行者であり、皇帝^{カイザー}ラインハルトがいずれ玉座に復する日が約束されている以上、それはラインハルトへの忠誠に矛盾するものではなかったのである。

『要するに皇帝^{カイザー}ラインハルトと帝国大公キルヒアイスが、いっそのものである限り、ロイエンタールの忠誠は彼ら二人に対して揺るぎなきものとして存在した。言い換えれば、いかなる存在を持つ

としても、ロイエンタールのラインハルトへの忠誠は、その代替を見いだし得なかったとさえ言えよう。あくまで一面においての評価ではあるにしろ、ロイエンタールこそ、キルヒアイスをすら凌いで皇帝^{カイザー}ラインハルトの最も忠実な臣下であったと評するべきであろう。逆に、それゆえにこそ、ロイエンタールの聡明さは十分に察していたはずなのである。万が一にもラインハルトの存在が失われたとき、彼の忠誠は行き場を失い、迷走の果てにその行き着く先を求めて暴走することになるのではないかと……と』

遙か後年の評論ではあるが、ロイエンタール自身にさえ不明の極致であつたかも知れない彼自身の内心を、ある程度のレベルまで読み解いたものとは言えるだろう。

ロイエンタール自身はもとよりラインハルトにも、この時は微かな予感としてさえ、彼らの未来への視野は望むべくもなかった。

『そうか、それならば良い。卿への処分は近日中に決しせしめよう。それまでは宿舎において指示を待つがいい。その間、卿の職務はメックリンガーをして代行させる。新帝都への軍主力移動は、ロイエンタールへの処分を決して後まで保留せよ』

この時点ですでにラインハルトが体力の限界に達していたことは、出席者の誰にも明らかだった。頬からは血色は失せ、両肩が大きく上下に動くのがスクリーン越しにもそれと知れた。ミッターマイヤーなどは正視できず、思わず目を逸らせたほどである。

しかし、ラインハルトの双眸は、ロイエンタールをして彼の上位者であり、唯一無二の皇帝^{カイザー}であると認識させるに十分な眼光

を保っていた。

『卿らの忠誠こそ、予にとつて二なきものだ。そして、予は罪あるものは罰する。だが、罪を犯す恐れあるがゆえに罰するは、予の最も採らぬところだ。くどいかも知れぬが、今一度、卿らには心得てもらつておきたい。再び卿らと語り合うべき次の機会はしばらく将来^{さき}のことになるやもしれぬゆえにな』

「何をおっしゃいますか!？」

立ち上がったのはミッターマイヤーだった。死出の別れの言葉ともとれかねないラインハルトの言葉が、ミッターマイヤーの血相を変えさせていた。

「陛下のお言葉とも思われぬ弱気と承ります。まさか、ロイエンタールに叛意ありとして御治世に御自信を失われたなどと……」

応じたラインハルトの声は、ミッターマイヤーの懸念をよそに覇者の強韌さを失つていなかった。

『ミッターマイヤー、卿の口は大軍を叱咤すべきものだ。そのような世迷い言、卿には似つかわしくない。二度と口にするな』

「は……ぎ、御意!!」

威に打たれてミッターマイヤーがフロアに膝をつき、頭^{こづか}を垂れた。

『予の言葉に裏を考える必要などない。安んじて予が恢復を待て』

出席者たちは慌ただしく視線を見交わし、滅多にない光景に密かに安堵の苦笑を交わす。一〇〇万の大軍、疾風^{ウオルフ・デア・シュトルム}ウオルフをして狼狽せしむる能わず、ただ皇帝^{カイザー}の病のみ、彼をして言葉^{言葉}を失わせしむ……と。

ラインハルト自身から散会が告げられ、審問会場から退出する一同を、彼らの下僚達が出迎える。ロイエンタールの参謀長ゾンネンフェルス中将、副官のレッケンドルフ少佐の姿もあったが、彼らはロイエンタールと直接言葉を交わすことは許されなかった。

「お願いです、そのコールラウシュとかいう女にロイエンタール元帥と直接の対決をさせるようお取りはからいください。すれば、女の証言など事実無根、元帥が罪なくして咎をおわされようとされていること、自明のこととなりましょう！」

レッケンドルフが半ば激昂して食い下がるのに、ミッターマイヤーの一喝が飛んだ。

「控えろ、レッケンドルフ。既にこの件は陛下御自ら御裁定なさることと定まった」

「し、しかし……」

「なお言うか!?!」

ミッターマイヤーの声が叱正の響きを帯びて驚き、レッケンドルフを立ち竦ませる。

「陛下は、その女についてもロイエンタール元帥にお問いになり、元帥はそれに答えた。これ以上、陛下の御裁定に不服を申し立てるは、陛下御自身への不服従を公言するに等しいことと卿には理解できぬのか。できぬなら軍籍を返上し、この場を去るが良い」

「……」

声もなく佇立するレッケンドルフとゾンネンフェルスに、なお表情を崩さぬままにミッターマイヤーは歩み寄った。

「私もロイエンタール元帥の無実を信じたい。陛下は、ロイエンタール元帥と私が始めて陛下とお会いした時のことを元帥にお問いになった。元帥の忠誠を、陛下が忘れておられぬと、私は信じる」

「げ……元帥」

「卿らもロイエンタール元帥の無実を信じろ。そして、陛下が無実の者を罰する方ではないこともな」

後、ミッターマイヤーのロイエンタールへの信義、そしてラインハルトへの忠誠が語られるとき、必ず引き合いに出される挿話となる一場面である。

その場にあつたほぼ全員が目撃した光景を、しかし、視野に収めることなく立ち去った極少数者も存在する。

「宜しいのですか、このまま陛下の御裁定のままにロイエンタール元帥への処分が決されたとしても」

「異な事を言う」

義眼の国務尚書は、無表情な視線で発言者を一瞥した。軍務省勤務者の過半が、それを受けただけで胃痛を起こすとさえ言われるほどに冷え切った視線を、フェルナーは平然として受け止めた。

「自由惑星同盟は滅亡し、ヤン・ウエンリーの一党も稼働兵力の過半を失っています。たとえ多少の蠢動があるとしても、キルヒアイス帝国大公が押さえになっておられる限りにおいては、帝国の安寧を揺るがすような事態は考えられますまい」

受け止めるばかりでなく、平然としてオーベルシュタインに異を唱え得るのも軍務省中唯一の存在と言わべきだった。

「卿は私がロイエンタール元帥を肅清したがっていると思つて

いるのか」

「肅清しても、ローエンングラム王朝が揺らぐリスクは低い。そう
は思っています」

聞きようによつては恐ろしい内容を平然と言い切る部下に、
オーベルシュタインは微かに眉根を動かしたようだった。

「卿がどう考えようと、それは卿の自由というものだ。ロイエン
タール元帥の行状には、第三者として瑕疵ありと見られても仕
方のない一面があつた。これは事実だ。今回のことは、ロイエン
タール元帥が自ら招き寄せたことだ。ただ……」

「ただ？」

「私自身が、その第三者の一人だった。今回はそれだけのことだ。
あとは陛下の御裁定にお任せする。それが臣下たる者の務めと
いうべきだろう」

レッケンドルフなどが聞けば、『なにをいけしやあしやあと！』
と激昂しかねない台詞を無表情に吐き捨て、オーベルシュタ
インはそれなりその話題を打ち切った。フェルナーも敢えて固
執することなく、保留された軍務省のフェザーン移転について
の懸案を提示し、オーベルシュタインの裁可を得ると、その足で
自室へと立ち去つていった。

フェルナーが慌ただしく立ち去つた理由を、オーベルシュタ
インは執務室に戻つてすぐに察することができた。

栄養の行き渡つた巨大な赤ん坊を思わせる肥満体が、控え室
のソファに身を沈めて部屋の主を待っていたのである。フェル
ナーは、本来なら内務次官として内務省に籍を置くべきこの男
が、腰巾着よろしく軍務尚書の周囲にまわりつくのを見避し
ているのだ。無論、あからさまにはないが。

「へ、陛下の御裁定はどのように？ ロイエンタール元帥にはど
のような処罰が？」

騒々しく立ち上がる元内国安全保障局長……現職は内務次官
に、オーベルシュタインは彼を執務室に招き入れる手間をも省
いた。

「そのようなことを卿に説明せねばならぬ義務は私にはない。
いずれ結果は公式に公表されよう。それまで待て」

視線すら向けぬままに平板極まる口調で応じられ、既に紅潮
していたラングの顔が頭頂部まで真っ赤になった。

「し、しかし、国事犯の一族を愛人として、その女との間に子ま
で為した上に、さらにこの上を直指そうなどと放言したのです
ぞ。これが陛下に対する明確な反逆の意思表示でなくてなんだ
とおっしゃるのですか!？」

「そう考えたからこそ、卿は報告書を提出したのであろう。卿は
告発者であつて、断罪者ではない。ロイエンタール元帥を処断で
きるのは、陛下お一人だ。卿は、陛下を差し置いてロイエンター
ル元帥に対する断罪者たるを主張するつもりか」

オーベルシュタインの凝視に対して、ラングはフェルナーほ
どの耐性を持たない。血色のよかつた顔面からみるみる血流を
減少させながら、ラングは反論の言葉と新たな酸素を求めてあ
えぐように天井を見上げた。

そのラングを、オーベルシュタインはやはり表情を変えぬま
まに見つめていたが、やがて無造作に次の言葉を投げつけた。

「ラング……」

「は……」

「私を失望させるな。卿の任務は国内の敵を監視して王朝を安

泰ならしめるにある。私怨を持つて建国の元勳を誣告し、かえって王朝の基礎を弱めたりすれば、不忠の極たるものとなる。よく心得ておくが良い」

「……は、よくよく心得ておきます。軍務尚書には、くれぐれも御懸念なきよう」

オーベルシュタインには透視能力はない。深々と下げられ、床と対面したラングの表情が恐懼ではなく、嘲弄と侮蔑のモザイクに彩られていたことなど、彼の視野に入りようもないことだった。

「この後、帝国の直面した事態に対してオーベルシュタイン軍務尚書がどの程度の責任を負うべなのかは定かではない。彼は臣僚のだれをも信じられぬが故に、その危険さを知りつつラングを手駒として、ロイエンタール元帥を巡る肅清騒ぎを引き起こさせたのだとも言える。彼にしてみれば、ラングなどは取るに足らぬ小物であり、必要に応じて取捨できる道具でしかなかったに違いない。今にして思えば、新帝国暦二年のこの時期、ラングの野心は明確な輪郭を露わにし始めていたように思われる。

^{カイザー}皇帝ラインハルト陛下の病臥とキルヒアイス帝国大公の不在が、彼の野心に加速をかけたことは否み得ない事実であるように思われるのだ。彼はロイエンタールのように数知れぬ武勲を重ねた不敗の名将ではなかった。オーベルシュタインのように、謀略と軍政の能力によって主君と国家の公敵を掃滅してきた有力な幕僚でもなかった。彼は単なる陰謀家であり、不名誉な秘密警察の長であるに過ぎなかった。だが、歴史は無数の実例を持つて吾々に教示する。能力も識見もない単なる陰謀家たちが形作つた陰謀と謀略と裏切りの連環が、彼らよりもはるかに有能な、あ

るいは偉大な人物を底なし沼に突き落とし、その相手だけではなく時代そのものの可能性をも沈め去ってしまうことを……」

後にこの手記を残すことになるのは、言うまでもなく芸術界提督エルネスト・メックリンガーである。彼はこの時、ロイエンタールの代行者として二〇〇〇万の大軍統括を司る立場にあり、ラングの背後にうごめく『陰謀と謀略と裏切りの連環』には思いをいたす余力はなかった。また、この時点で彼自身もまたラングを取るに足らぬ小物の陰謀家としてしかとらえてはいなかった。彼を含め、帝国首脳の視線はひたすらに^{カイザー}皇帝ラインハルトの病状にのみ据えられており、それ以外の一切の事象は些細な雑音として脳裏の片隅に追いやられていたのである。

「^{カイザー}皇帝ラインハルトが、ロイエンタール元帥に重罰を下すとは思われない。^{カイザー}皇帝自身が、罪を犯す恐れがあるからと言って罰せぬと宣したという。ロイエンタールも、コールラウシュの証言は否定した。妊娠したと知れば直ちに墮胎させていたとな。^{カイザー}皇帝は、それについて黙って領いたそうだ」

メックリンガーは無論のこと、オーベルシュタインですらラングへの認識を一変させたに違いない。

必要以上に厚い内壁。地上に出るまでに何重にも設けられた隔壁と耐爆ドア。壁面の巨大な視界スクリーンは^{ノイエ・サンスト}新無憂宮の一角を表示し、その傍らのパネルでは複数のLEDが静かに点滅を繰り返している。

ラングが座しているのは、公的にも私的にも彼とは全く関係のない建物の地下に設えられた一室である。彼がなおその支配

に実権を握っている内国安全保障局は、秘密警察にふさわしく多くの『隠れ家』^{セイフ・ハウス}を保有しているが、この建物はそうした『隠れ家』^{セイフ・ハウス}ですらなかった。憲兵総監のケスラー上級大將が建物の正体を知れば、躍り上がって帝都の前憲兵隊の動員を命じたに違いない。地球教徒が帝国に対して存在を隠しおこせた最後の帝都の拠点。フェザーンの駐在高等弁務官ですら存在は知らされず、地球教の幹部と、フェザーン自治領主^{ランデスヘル}にのみ、その所在が知らされていた拠点。ラングが一人、座をしめている建物の素性がそれだった。

「皇帝^{カイザー}が重罪を下せば、ロイエンタールとて黙っていなかったはずだ。直ちに武装蜂起するか否かは別としても、オーベルシュタインの非を鳴らし、冤罪を主張して皇帝^{カイザー}に直訴するくらいの行動は起こす。そうなればロイエンタールは皇帝^{カイザー}の矜持と尊厳に正面から挑戦することとなる。いくら皇帝^{カイザー}ラインハルトが臣下に寛大であり、ロイエンタールを信頼していようと、黙って相手の言い分を受け入れるはずもない。両者の間に決定的なひびが入るに違いないはずだった」

『それほどの見込み違いでもないと考えますがな、次官』

濁った声が室内にこもった空気を震わせる。変調されているだけでなく、声自体がやや歪み、弱々しく震えているような印象だった。

ラングは眉を顰めた。

「何をのんきなことを言っている、自治領主^{ランデスヘル}。今回のこと、卿が言い出したことではないか」

『少なくとも皇帝^{カイザー}ラインハルトの心理の一端にはロイエンタールへの疑惑を植え込んだことになる……でしょう。寧ろ、このままロイエンタールにはフェザーンへ発させた方が……そうすな……いろいろなやりやすい』

「二〇〇〇万もの将兵と八万隻の艦隊を指揮することになるのだぞ。皇帝^{カイザー}が病床に伏し、帝国大公も旧同盟領からは足が抜けぬ以上、帝国の軍権は事実上、ロイエンタールのものとなってしまうではないか」

『巨大な軍権を持った名將が、主君から数千光年の彼方に本拠を構える。その本拠は交通の要衝であり、かつ帝国と旧同盟の間にあって商業航路の中枢でもある。人類全体の二割近い富が集出し、帝国にも旧同盟にも容易に打って出ることのできる地の利にも恵まれている。麾下將兵は不敗の名將に対する忠誠に篤く、かつ帝国軍の粹とも言うべき熟練兵と最新の戦闘艦艇をそろえている』

『……これだけの条件を整えられて、なお最高権力を望まないというのは、よほどのお人好しですな』

もう一種類の声割り込んでくる。先ほどの声とは一転し、張りのある朗々たる響きは変調を受けてさえもその印象をいささかも薄めなかった。

『そろそろ潮時でしょう。あの話を進めてはいかがでしょうか。皇帝^{カイザー}も帝国大公もすぐには帝国政府を主導できない。遠くには巨大な兵力と野心を抱え込んだ名將が割拠の態勢を示している。文官達としては、武力ではなく法文を持ってして統治の実を上げるべき時。そう考えるべき時がいよいよ来たということ

です」

「そんなにうまくいくのか？ まだ、イゼルローンにヤン艦隊が健在である以上、今、文民統制と集団統治、責任内閣制……か、そんな精度を唱えたところで、帝国軍の連中があつさりと頷くとは限らんぞ」

『ヤン艦隊については心配ない』

最初の声が割って入った。

『それについては手を打った』

『みんな、殺した。みんなね……』

第四の声が響いた瞬間、ラングは背を這い上る悪寒に顔を歪めた。初めて聞く声だったが、まるでガラスに爪をたてたような曰く言いがたい違和感が、聴覚から全身に突っ走ったのだ。

『ヤン・ウエンリーは死んだ』

それなり第四の声は沈黙に陥り、ラングは額の汗をぬぐった。自身、信じられぬほどの発汗が、額から顔面全体を濡らしていた。「まさか……」

『いずれ、イゼルローン要塞から公式の発表があるはずだ。ヤン・ウエンリーは、帝国大公との会見に向かう途上、正体不明の暗殺者集団に襲撃され、射殺された、とな。ヤンがいなくなれば、イゼルローン要塞とヤン艦隊の存在など、もはや計算に入れる価値すらない。帝国軍は戦うべき最大の公敵を失い、その存在意義も消滅する』

『そして、例の帝国大公による統治制度研究ですよ。帝国大公自らが研究し、準備した制度となれば、帝国政府は無論のこと、帝国軍の首脳どもでさえ、反論は難しい』

まして、それはキルヒアイスが皇帝^{カイザー}ラインハルトへの重すぎ

る統治の負担軽減を考えて研究を進めさせた成果なのだ。ラインハルトが病臥した現在、偉大すぎる皇帝を肩代わりする政治機構はすぐにでも必要なのである。

『皇帝^{カイザー}がある程度回復しない……限りは、帝国政府そのものは旧帝都^{オールドイン}からは動けない。一方、軍権の中心はロイエンタールとともにフェザーンへ移る。政府が、新制度によって文民統制に着手し、国内の統治が文官の主導するところとなっていくのを、フェザーンにあるロイエンタールはどう見るでしょうな』

「しかし……ロイエンタールがあくまで皇帝^{カイザー}ラインハルトに忠誠を誓っているなら、異を唱えはすまい？」

『確かに……』

遠い声が微かな嘲笑を帯びた。ようにラングには聞こえた。

『確かに、ロイエンタールは忠誠を誓っている。皇帝^{カイザー}ラインハルト一人に。もし、帝国政府が皇帝^{カイザー}ラインハルトの意思を離れ、文官の都合だけで運営されるようになったと彼が信じれば、どうなります……かな？ かつ、その制度は帝国大公キルヒアイスの研究を元に導入されたとなれば？』

「む……」

ラングの表情が変わり、憑かれたような目が壁面のスクリーンに固定する。新無憂宮^{ノイエ・サンスーン}南苑。今や、病中の皇帝^{カイザー}ラインハルトが重病の身を養う場となっている一角は、無数の照明が夜の闇を払いのけて、建物の輪郭をくつきりと浮かび上がらせている。微かに見て取れる人の動きに大きな変化はなく、なにごとくもなく治療が進められていることがうかがわれた。

「政府と軍の間に手は打ててあるのだろうか」

『それは十分に。閣下のおかげで資金と時間は十分にありましたからね。焦らぬことです。あくまで緩やかに、徐々に、皇帝ラインハルトや帝国大公キルヒアイスがそれと気づいたときには既に手遅れとなっている。それが理想です。そうして、吾らが手に帝国を握るまで、くれぐれも急がれぬことですぞ』

『……リスクがあるとすれば、帝国大公キルヒアイスが、予想外に早くフェザーンに戻ることは……』

『……みんな、殺してしまえば良いのよ。殺して良い？』

ふたたび、第四の声が割って入り、通話が一瞬に空白になる。

ラングは再びハンカチを出して額を拭う。人の声に違いないのだが、この通話に限っては、人間を不安と恐慌に陥れるような、そんな音声成分を故意に混ぜ込んでいるのではないか。そんな妄想さえ浮かぶほどに、安定を欠き、人ならぬ者の発した声のような軋みを帯びて聴覚を搔きむしるのだ。

『……任せよう』

よほどの間が開き、太いがかすれた声が応じる。明確な応答はなく、微かな笑い声のような曖昧な揺らぎが流れたあと、回線の切れる音が小さく聞こえた。同時に、明らかな複数のため息らしき響きがラングのそれに重なった。

『……宜しいか』

ややあって、再びスピーカを震わせた声がラングを現実に戻した。

『あと僅かだ、あと僅かで、帝国は吾らのものとなる』

その一報が、イゼルローン回廊の帝国側出口に定置した

影の城要塞によって傍受され、旧帝都に達したのは五月五日二二時三五分。皇帝ラインハルトによるロイエンタールへの審問が終わって一〇時間余り後のことだった。

「まさか……」

一報に接した帝国政府関係者は一様に顔を見合わせ、その内容について半信半疑の表情を隠せなかった。しかし、遅れること約六時間、ジークフリード・キルヒアイス帝国大公の名でもたらされた公式報告は、影の城経由の報告をほぼそのまま裏付ける内容だった。

「まさか……あの魔術師が死んだというのか。何かのトリックではないのか」

「しかし……心肺停止状態で発見後、加療不可能と判断とある。これは明確に死亡を意味する言葉ではないか」

「まさか……まさか、あのヤン・ウエンリーが……暗殺者の手にかかるなど……」

「……にしても、誰だ。誰があの魔術師を？ 何のために？」

なお疑念を捨て切れずに囁き交わす帝国政府首脳たちをよそに、報告を携えてラインハルトの病棟へと向かったのはヒルデガルト・フォン・マリンドルフ伯爵令嬢だった。通い慣れた通路をたどりながらヒルダは、背にのしかかる重みを感じている。宿敵の死をラインハルトが単純に歓迎するとは彼女には思えなかった。彼女が最も恐れるのは、戦うべき敵の消滅がラインハルトに負の衝撃を与え、治療に対するマイナスの影響となって現れてくることだった。

皇帝首席秘書官として、あるいは幕僚総監として、この心弾ま

ぬ仕事を拒否することはできなかった。もし、既に皇妃と呼ばれる立場になっていたとしたならば……考えかけ、左右に大きく首を振る。

「そのような知らせを、皇帝陛下はお望みになりません」

歴史を彩ってきた愚劣で蒙昧な無数の妃嬪たちと道を同じくするような言葉を口にできようはずもない。至近の例で言えば、自由惑星同盟でも、政府首脳が彼らの好みで情報を取捨するようになってから、彼らの滅亡への足取りはその歩みを速めたと言われている。

病棟区画で彼女を出迎えたグレーチェンが、バウアーシュミット医師からのメッセージを伝えた。

「昨日の審問で無理がかかった可能性がある。報告は五分以内に切り上げてほしいとのことだ。詳細のレポートは提出済みとのことだ」

「そうですか……やはり……」

瞬時、直接の報告は見合わせ、報告書の提出だけにとどめるかと思う。病床にあってもラインハルトは決して国政から完全に遮断されているわけではない。内政については國務省と秘書官室、軍事については軍務省と統帥本部で処理し、どうしても皇帝^{カイザー}の耳に入れておかねばならない最小限度の報告書は日々、病室のラインハルトのもとへ提出されている。加療開始前に比べてはるかに量を減じているとは言え、それらに目を通すだけでも、ラインハルトの療養の時間は日に数時間を削られることになる。「可能なら、こうした報告書の上奏ももっと押さえていただきたいのですが」

バウアーシュミット医師からはそう苦情が出ているが、もと

もと帝国の仕組み自体が、最終決裁者としてのラインハルトを想定して構築されている。どうしてもラインハルト自身の親裁を要する事案というものはあり、早い話が、昨日のロイエンタールに対する審問と、その処分に関する判断などは明らかに國務省や軍務省の手に余る。たとえ、國務省が皇帝^{カイザー}の代行として何らかの決定を提示したとしても、まず現在の帝国の法体系は、これを國務省の越権行為と断じることになる。

軍務省は軍の人事権を掌握しているが、ロイエンタールは皇帝^{カイザー}自らが勅任した元帥である。帝国軍元帥は、ゴールデンバウム王朝時代から軍務省の人事権を超越した地位として定義されており、コロエングラム王朝でも改められてはいないのだ。統帥本部や宇宙艦隊司令部は論外である。

ことほどきょうに、仮にラインハルトの親裁を完全にゼロにしてしまった場合、帝国は複数の組織間の調整不可能な政治的判断の狭間に宙ぶらりんとなり、その統治は大きすぎる停滞を強いられることになるに違いない。停滞どころか、最悪の場合、統治そのものが成立し得ずに帝国自体が空中分解し、無数の地方政権の割拠する状態にまで陥りかねないのだ。

キルヒアイスが旧帝都^{オールドイン}、最悪でも新帝都にあれば、皇帝^{カイザー}の親裁の過半を代行し、ラインハルトを治療に専念させることはできただろう。何度も繰り返すことになるが、キルヒアイスの不在は、この時期の帝国にとって痛恨事ともいうべき事態だった。

ヒルダが迷ったのは、たとえ親裁を要する事項でも、すべてが口頭での報告とラインハルトの直裁を仰ぐ必要はないということだった。報告書だけを提出し、健康状態の良いときにラインハ

ルトが目を通し、必要に応じて臣僚に説明を命じる。ことは、帝国の公敵ヤン・ウエンリーの訃報である。事実だけを告げればよく、皇帝^{カイザー}の判断は必須ではない。

もう一度、ヒルダは頭^{かぶり}を振った。やはり、それはできなかった。

ラインハルトの健康状態が思わしくないのはスクリーン越しでも明らかだった。

『済まぬな、フロイライン。今日はこんな姿でしか報告を受けられぬ。それも五分以内だと医師たちに念を押された。これでは誰が皇帝^{カイザー}なのかわかったものではないな』

ベッドに横たわったまま、顔だけをスクリーンに向けて、それでもラインハルトはヒルダに向けて微笑んでみせる。昨日よりもさらに疲労と憔悴の色が濃く、口調の明るさとの落差の大きさに、ヒルダは胸の詰まるのを感じた。

『案じるな、フロイライン。バウアーシユミットにはこの病の正体究明も急ぐよう命じておいた。彼の研究については、マリィンドルフ伯爵家から帝国政府が正式に引き取るよう学芸尚書にも伝えてある』

『陛下……その、余りにお話になられては、お疲れが……それに時間も余りありません』

『そうだな。聞かせてくれ、フロイライン』

最初の言葉を発する前にヒルダは大きく息を呑み、目を閉ざす。

「昨日、イゼルローン要塞から全宇宙に向けて訃報が発せられました」

脳裏で言葉が組み上がるのを待つて、目を見開く。不審そうに眉を顰めるラインハルトの前に、一息に言葉を紡いだ。

「ヤン・ウエンリーが亡くなったのです」

つかの間、ラインハルトはヒルダの言葉を理解できないかのように、不審な視線を美しい首席秘書官、そして彼の未来の王妃に据えて動かさなかった。数秒の後、言葉が理解に達し、その意味するところを了解すると同時に、ラインハルトは落雷にでも打たれたかのように身体をこわばらせた。失望と動揺が落雷のように彼の全身に落ちかかり、ラインハルトはベッドから身を起こしかけて果たさず、それでもベッドの柱を両手でつかんで、ヒルダを見据えた。看護ドローンが音もなく姿を現し、皇帝^{カイザー}の身体を機械の手で抱え上げようとする。ラインハルトは、病人には似つかわしくない荒々しい動作でドローンたちを振り払い、機械たちは困惑したように僅かにベッドサイドから退いた。そのまま中空に待機し、病人の激情が去るのを待つようだった。

『フロイライン……フロイライン!』

豪華な黄金の髪が風をはらんだ。

『あなたから兇報を告げられたことは何度もあるが、今回ののは極めつけだ。それほど予を失望させる権利があなたにはあるのか?』

それが理不尽な叫びであることはラインハルト自身は十分に察していたはずである。

『予は、予以外の者に斃される権利をあの男に与えたつもりはない。あの男はバーミリオンでもイゼルローン回廊でも予に勝たせなかった。予の貴重な将帥を幾人も斃した。その挙げ句に、予以外の者の手にかかったというのか!』

その責任がまるでヒルダにあるかのように、激情を迸らせ、そこでラインハルトは力を失ったようにベッドの柱から手を離す。素早くドローンが舞い寄り、患者の身体を抱え上げてベッドに戻し、乱れた寝具を整えるのが見えた。胸元まで寝具を掛けられると、^{ヴァージン・スノー}処女雪を固めたような肌を紅潮させていた血流が去り、それとともに激情と怒気が鎮まっていくな。ややつて、ラインハルトは再びヒルダに視線を向けた。

『イゼルローン要塞に予の名代として誰かを派遣したい。弔問の使者としてだ。誰が良いと思う？』

「^{わたくし}私が参りましょうか？」

『いや、あなたは常に予のそばにいてもらわねば困る』

当然のようにラインハルトは言い切り、思案の視線を病室の天井に向けた。鼓動の瞬間の乱れを意識して軽く胸を押さえた後、慌てて身仕舞いを正したヒルダの様子には、ラインハルトは気づかなかったようだった。

『今は休戦しているとは言え、イゼルローンはなお敵地と言つて良いし、あなたを皇妃として迎える旨はすでに公表してある以上、あなたに無用の危険を冒させることはできぬ』

鼓動の乱れの後は頬の血流量の変化を意識し、ヒルダは思わず床に視線を落とす。冷静に考えれば、ラインハルトは為政者として、あるいは軍人として、彼女をイゼルローン要塞に派遣する上でのリスクを考慮しているに過ぎない。単に首席秘書官であり、幕僚総監であるという立場でしかなかったとしても、万一にも彼女が遭難したとき、その責任をヤン艦隊に問うメリットと、得がたい幕僚を失うことのデメリットを勘案して、ラインハルトはやはり彼女のイゼルローン要塞行きを首肯しなかったのだろ

う。その上に、ヒルダが未来の皇妃としての立場を与えられた今、⁴⁸その身を人質に取られることの危険性までもが、ラインハルトの視野には入っているに違いない。確かに、ローエングラム王朝初代皇帝の皇妃の身柄は、帝国に対する敵対勢力にとつて魅力的なものとして映るに違いない。

『……ワーレンだな。ワーレンも我が軍に欠くべからざる重鎮ゆえ、イゼルローン要塞の者たちも軽々の対応は慎もう。ワーレンに、予の名代としてイゼルローンへ向かうよう命じてくれ、フロイライン』

「確かに承りました。ワーレン上級大将にお伝えします。陛下のお名前でもイゼルローンに弔電を発してはいかがでしょうか。回廊の戦いから日も浅うございます。陛下御自ら、ヤン提督への弔意を表されれば、イゼルローンのヤン艦隊将兵も、ワーレン提督への敵意を和らげるでしょう」

『そうだな……ヤンの死を、予が心から悼んでいる旨の文面で、しかるべくお願いする、フロイライン』

スクリーンの一角に医療スタッフからのメッセージが浮かぶ。五分の報告時間が既に経過していることを警告していた。

「弔電の件も確かに承りました。では、陛下……失礼いたします」
『フロイライン……』

僅かに後ろ髪を引かれる思いで一揖し、踵を返そうとしたヒルダをラインハルトが呼び止めた。

「はい、陛下」

『ロイエンタールのことは案じるな。彼の忠誠を予は疑ったことはない……ただ……』

「ただ……？」

『キルヒアイスに会いたい。どうしてキルヒアイスは帰ってきてくれないのだ。キルヒアイスさえいてくれれば……予も……そうだ、姉上だ。姉上も待つているというのに……』

声が途切れる。

「陛下!!」

はつとしてスクリーンに駆け寄るヒルダに、医療スタッフの声が響いた。

『お休みになりました。ややバイタルが低下しております。明日から数日は直接のご報告はお控えいただけると幸いです』

「分かりました」

部屋の出がけ、ヒルダはドアの脇に佇立していたグレーチェンの顔色に気づく。その顔色が蒼白だった。

「グレーチェン、退出します」

「うん……ああ、失礼した」

ヒルダとともに部屋を出る足取りもいつになく機械的で虚ろだった。ヤンの訃報によほどの衝撃を受けたに違いことは間違いなかった。

確かにヤン・ウエンリー提督の死は、今やイゼルローン要塞に僅かに余端を残すのみとなった旧自由惑星同盟の残存勢力にとって、完全なる絶望を告げるものに違いない。ヤン艦隊の一員として戦ったというグレーチェン・ヘルクスハイムが受けた衝撃の大きさも無理はないことと理解できる。

衝撃を受けたのは私たちも同じだ——ヒルダは思う。これまで帝国が最大の敵として戦ってきた、その当の相手が不意にその姿を消したのだ。皇帝^{カイザー}ラインハルト自身がいみじくも口にしたように、ラインハルトを初めとする帝国軍についてに勝たせる

ことなく、帝国軍の将帥たちのほぼ全員に敗北の苦杯を仰がせた。彼らは等しく『次こそはやられぬ』と復仇の思いを胸の裡に蔵しているに違いない。高等弁務官としての地位を、ある意味で悪用してのヤンの排除を謀ったレンネンキャンプの行動も、そうした思いの誤った表れに違いなかった。

言い換えれば、これまで帝国軍の前に聳え立ち、頑としてその圧力を跳ね返り続けてきた巨大な壁が不意に消滅したとも言える——ヒルダは悪寒を感じた。

古来言う、『狡兎死して走狗煮らる』。外なる敵が消えれば、敵を掃滅すべき武力はもはや必要とされず、『神々の黄昏』^{ラグナロク}作戦やバーミリオンの、イゼルローン回廊の戦いのような巨大な戦い、別の言い方をすれば武勲のための機会はほぼ失われることになるだろう。ヤンと彼の一派の存在を前提として、なおその存在意義を主張してきた帝国軍と、さらなる高位を目指して戦場での武勲を夢見る多くの将帥たちは、不意に訪れることになるだろう。偃武^{えんぶ}の時代に戸惑いと反発を隠しきれなくなるのではないか。ヒルダはさらに思い出した——ラインハルトは言わなかったか……ロイエンタールのことは案じるな、と。ラインハルトは暗に言明したのだ。皇帝^{カイザー}として『狡兎死して走狗煮らる』の故事は採らないと。ヤンの訃報から、おそらくはラインハルト自身も、今日以降の帝国の行く末に思いを馳せたに違いなかった。その上で、ロイエンタールを引き続いて厚く遇する意思を明らかにすること、軍の動揺をまず鎮める意思をヒルダに告げたのだろう。

キルヒアイス帝国大公さえ、ここにおられたら……ヒルダは

天を仰がずにはいらなかった。キルヒアイスが皇帝カイザーと共にあれば、ラインハルトの意思を過たずに実務化し、政府と軍の動揺と混乱を最小限度に押さえきっていただろうに。だが、今は彼の不在を嘆くよりも、今ここにある人々の手で最善と思われる手を尽くす以外にない。それすらせず、ただキルヒアイスの不在を嘆くばかりでは、大神オーディンとて救いの手をさしのべようとの想いを抱こうはずもないではないか。

ラインハルトがロイエンタールへの処分を言い渡したのは、二週間を経過した五月一九日のことである。

再び新無憂宮ノイエ・サンス・シユート・ガルテン南苑、『晴眼帝のサロン』に参集した帝国軍の幹部は、スクリーンに現れた彼らの皇帝カイザーの姿に一樣に息を呑んだ。

ラインハルトは憔悴を深めていた。無惨と表するほどのことではないにしても、前回にくらべて顔色はさらに失われ、豪奢な黄金の髪までも僅かにその輝きを減じたかにさえ見える。ただ、その要望の秀麗さ、半神的なまでの美貌は損なわれておらず、スクリーン越しの眼光もまた『獅子帝』と表される鋭さ・烈しさを失っていないことが、僅かに一同に安堵させた。

『ロイエンタール、今回の告発については卿の罪は問わぬ』

冒頭のラインハルトの一言に、ミッターマイヤーが満面に気色を表して立ち上がった。発しかけた『皇帝万歳』ジーク・カイザーの叫びは、しかし未発にとどまった。隣席に座したアイゼナツハに袖を引

かれるままに着席すると、ミッターマイヤーは皇帝カイザーの次の言葉を待った。

ミッターマイヤーとアイゼナツハの細やかな幕間劇に一瞬だけ視線を投げ、ラインハルトは、跪礼を取って頭こゝろを垂れた金銀妖瞳ヘテロクロミアの名将に、蒼氷色の双眸を向けた。

『ロイエンタール、卿は可及的速やかに現職に復し、新帝都への遷都準備を整えよ。これに伴い、卿にはフェザーン回廊宙域、および回廊の帝国側、ならびに新領土側宙域の統治と軍事の全権を与える。その地位と待遇は尚書に匹敵するものであり、皇帝に對してのみ責任を負うものとする』

再びサロン内に無言のざわめきがひろがる。処罰どころではない。統帥本部総長としての、新帝都への帝国軍主力移動の任だけではない。当面の間、新帝都たるフェザーンと、その周辺宙域に對する政治・軍事の両全権を与えるものであり、その領域こそ限定されるものの、ラインハルト、キルヒアイスとならんで帝国を三分する権限とさえいえるほどの広範な権力がロイエンタール一人に委ねられることを意味する。

『ただし……』

一同の驚きを察したのか、あるいはあらかじめそれを予測していたに違いない。ラインハルトは両手を挙げ、あがりかけたざわめきを鎮まらせた。

『ロイエンタール、卿は新領土の帝国大公との連携を密にし、帝国大公の新帝都帰還を促進せよ。帝国大公の新帝都帰還後、フェザーンにおける卿の統治全権は帝国大公に引き継ぐものとする。帝国大公の新帝都帰還は、卿が新帝都に着任して半年以内の実

現を希望する』

皇帝^{カイザー}の命令は複数の反応を呼んだようだった。多数派は無論、ラインハルトの判断を是として頷く者たちだったが、ごく一握りの人々の間には寧ろ危惧を呼んだ。これほどに広範な権限、ある意味、新帝都を中心とする宙域の副皇帝の座とすら呼べるほどの権力をひとたび与えられて後、半年にしてキルヒアイスにすべてを譲り渡す。ロイエンタールほどの器と野望の所有者が、唯々として命に服するのを良しとするだろうか。

懸念を抱いた内の一人はヒルダであり、皮肉なことに彼女はオーベルシュタインが皇帝^{カイザー}に対して懸念を表明したことを知っていた。

「いかに相手がキルヒアイス帝国大公であろうとも、また、陛下御自身が『譲り渡せ』とおっしゃったところで、ロイエンタール元帥から見れば、ひとたび得た地位と権力の『剥奪』でしかありません」

オーベルシュタインからの進言に、ラインハルトはさして意外の念を示さなかった。ラインハルト自身、その懸念を抱いていたに違いなかった。

『……さらに、その後、卿には帝国大公帰還後の新領土統治の任を与えることとする。その際、統帥本部総長は帝国大公をもつて後継せしめる』

続いた言葉に、ロイエンタールは胸中に驚きと昂奮が広がるのを感じた。思いもかけぬ新たな地平が視野の中に広がるのを感じ、ロイエンタールは我にもなく身震いする自身を感じずにはいられなかった。

『時期と所要兵力については帝国大公と協議の上、可及的速や

かに新領土へ赴き、その治安を安定せしめよ。ウルヴァシー泊地駐留艦隊の指揮権は帝国大公の許に留保するが、他の統治・軍事については全権を卿に委ねるものとする』

ウルヴァシー駐留艦隊の指揮権についてラインハルトが言及したとき、ロイエンタールの右目が小さく動いて、オーベルシュタインをその視界に入れた。ウルヴァシー駐留艦隊をして彼に對する監視役とする。オーベルシュタインの入れ知恵に違いなく、ロイエンタールにしてみれば『小賢しいことを』と笑殺の衝動にかられそうになったのだ。あるいは、マリィンドルフ伯爵令嬢あたりも糸を引いているのかもしれないが。

——宇宙を手に入れる……

一度胸中に轟いた野心の声を、ロイエンタールは改めて思い起こしていた。新帝都で帝国のほぼすべての軍事力と、その周辺宙域を掌握する統治全権。それだけでも凡人にとつては目もくらむほどの栄光の座であろう。さらにその上に、皇帝^{カイザー}ラインハルトは、ロイエンタールをして帝国全土の半分……それがほんの一年ほど前までは敵国であつたにしても、人類を二分した巨大勢力の一方すべてを掌握せしめる。皇帝^{カイザー}ラインハルトの、これほどまでの知遇を得たことへの感動は、無論ロイエンタールの裡にある。同時に、一氣に広がったかに見える野望の地平に對して、ロイエンタールはある種の畏れすら感じていた。

万一にも、我が皇帝^{マイン・カイザー}を失えば、胸の裡に盤踞する野心が時を得て目覚め、天翔ける巨竜と化するのを防ぐすべもまた失われるかも知れない。我が皇帝^{マイン・カイザー}は己をいずれへ赴かせようとしているのか、これほどの立場を与え、なお頭上にあつて我が讃仰^{しるし}の徴

としてなお光輝ある存在でありつづけることを、我が皇帝は己に保証し賜うのか。

「身に余る光栄であります、我が皇帝よ」

我が皇帝……全帝国軍で最も美しくその単語を発音したとされる声で、ロイエンタールは彼の皇帝に呼びかけた。

「非才のこの身に、これほどの処遇をいただきしことへの想い、いかなる言葉を持つてしても尽くすこと叶わぬと信じるどころであります。この上は、この身を以て陛下のご信頼に応ずべく、身を尽くす所存にございます」

『その言やよし。期待しよう』

なお深い憔悴と疲労に面差しを翳らせつつも、ラインハルトもまた熾烈なほどの眼光を緩めていなかった。

「御意……どうか、陛下、我が忠誠に、ご本復をもつてお報いくださいますよう」

それはある意味でロイエンタールの本心そのものに違いなかった。彼はラインハルトの病没などを望んでいなかった。ラインハルトが回復し、再び玉座にその華麗な姿を見いだす日を、ロイエンタールは紛うことなく渴望していたのである。

『約そう、ロイエンタール。必ずや回復し、卿らの許に戻ることを』

微笑で応じたラインハルトに、さらに深々と礼を施したロイエンタールは立ち上がった。同時に朗々とその声を張り上げた。

「皇帝万歳!!」

最初に和したのは、おそらくはミッターマイヤーだっただろう。親友が宥恕され、さらに名誉ある地位で報われたことに、彼

は純粹な喜色を満面に浮かべ、ロイエンタールの声にまつさきに席を立つたのである。他の出席者も、無論のことオーベルシュタインもヒルダもまた席を立ち、普段は静謐な南苑の一角に轟く、皇帝を讃える叫びに加わったのである。

「皇帝ラインハルト万歳!!」

ロイエンタールに対するラインハルトの裁定が下され、ロイエンタールが当初予定通り新帝都に発つこととなった経緯は、三日の遅れで旧同盟領……以後は新領土……ケリム星区に達した。

「ようございました。まさかにロイエンタール元帥に何らかの処罰が下るなどとは思ってもおりませんでした……」

キルヒアイスに呼び出され、結果を知らされたベルゲンクリューンの鋭角的な表情にも安堵の色が濃かった。キルヒアイスは微笑い、スクリーンに浮かび上がった報告書に視線を走らせる。

「少しは不安があつたということですね？」

いつものように口調は柔らかいが、キルヒアイスの表情にも疲労の翳が深く差し掛かっている。四月に自由惑星同盟のレベロ最高評議会議長が、造反したロックウェル統合作戦本部長らに暗殺された結果、自由惑星同盟政府が崩壊。同盟政府が発行していた巨額の国債が償還不能に陥った結果として発生した経済恐慌は、なお同盟領全域と、さらには帝国の一部をも席卷し続けている。

前述したように、キルヒアイスは直ちに全自由惑星同盟領の帝国領への併呑を宣言すると共に、旧同盟政府資産と帝国政府の保証による旧同盟政府の未償還の国債の償還を実施した。しかし、未償還国債そのものの額は巨大であり、キルヒアイスによる矢継ぎ早の施策も、実施二ヶ月にもならない段階では、その効果を現すには余りにも時間が不足していた。

帝国政府のリヒター財務尚書の先見によって、帝国内の金融債権に対する施策が先行して実施されていたことと、同盟政府の破綻に先駆けて新領土の内、帝国軍の支配する星区での帝国経済圏への編入が進んでいたことから、恐慌の帝国への波及は最小限度で食い止められている。さもなければ、皇帝^{カイザー}ラインハルトの病臥と恐慌のダブルパンチを受けた帝国領内もまた、全域を経済的混乱とそれに伴う社会不安の蹂躪に任されることになっていたかも知れない。

「ジークフリード・キルヒアイスは、軍人として不敗の驍将であるのみならず、政治・経済の統治手腕においても一流の存在であることを示した」

後世、多くの経済史家がキルヒアイスを称揚するゆえんとなったのが、この時期に彼が示した水際だった施策群だった。

だが、新領土は広大であり、完全な混乱状態に陥った星区も多く、少なくない数の有人惑星が社会的な混乱から内乱に陥っている。経済が破綻したことで星区政府が統治能力を失い、中央政府もまた消滅して政治的空白が生じた結果だった。そこに私掠船……要するに宇宙海賊が介入し、さらには政府崩壊で失職した旧同盟軍将兵の一部が傭兵として混乱を加速、無政府状態を現出させた。今や、惑星表面が完全な戦乱状態となっている惑星

は片手では済まない。

内乱となれば、発生するのが難民である。無政府状態の惑星からは、ともかくあらゆる手段を経て市民達が脱出を試みており、キルヒアイス麾下の帝国軍が保護した難民だけですでに一〇〇万を超えている。この数はなお加速度的に進むと見られており、難民の収容先やその給養だけでも巨大な負担となるのは自明だった。

キルヒアイスは総軍を数十の機動部隊に再編成し、内乱状態の惑星に派出して鎮圧に当たらせている。

キルヒアイスの指示は思い切って辛辣、かつ苛烈だった。

「内乱を主導している勢力を、あらゆる手段を講じて殲滅する。特に宇宙海賊由来の勢力には妥協も交渉もありません」

キルヒアイスの指示は功奏し、複数の惑星で、内乱を煽動・主導していた勢力が孤立化された上で殲滅の憂き目を見た。だが、そうした惑星でも多くの場合、社会のインフラそのものが破壊されており、再建にはなお多くの時間を要しそうな状態だった。「少しずつ進めるしかありません。政治は軍事とは違います。忍耐力が試されるというところでしょうね」

並行してキルヒアイスが進めていたのは、以前から研究を進めていた、一部に議会制共和制制度を取り入れた統治機構の整備だった。

「もともとは、この議会制共和制に基づく国家群ですからね。帝国流の統治システムをそのまま適用してもうまく機能しない恐れがあります」

普通選挙と責任内閣制をすぐに復活させることはしなかった。旧同盟政府で少数派と言われた政治家、手腕を評価されながら

も政治とのコネクションや派閥力学で主流派からはじき出されていた官僚、さらには独立商人や学生にまで、キルヒアイスは人材を求めさせた。これらの作業は、『回廊の戦い』の前から着手されており、すでにケリム星区には新たな自治政府と呼べる組織が立ち上がり、キルヒアイスに対する補助統治機関としての機能を果たし始めている。ちなみに、その機関の首班はホワン・ルイ。旧同盟政府最高評議会の議員の一人である。

とは言え、新領土はまだ混乱と混乱と迷走の最中にあり、対策のすべてにキルヒアイスの手腕を要求した。『回廊の戦い』直後のラインハルトの病臥……それが、変異性劇症膠原病、後にカイザーリッヒ・克蘭クハイト
皇 帝 病 と呼ばれる疾病によるものと判明して後のキルヒアイスの心労は深かった。

帰りたいのだ。本音は、何もかも放り捨てて、ラインハルトの許へ帰りたい。ラインハルトの枕頭に座して、『きつと治ります』と励ましたい。ラインハルトが自分の帰りを待ち望んでいることに、彼は一片の疑いも抱いていない。アンネローゼのことで、ラインハルトが彼に何らかの不信を抱いていたとしても、そんなことは問題ではなかった。ラインハルトは彼の半身なのである。ラインハルトが喪われれば、キルヒアイスは自分の半身を喪うことになる。半身を……翼の半分を喪ってなお、一人で生きていけるとはキルヒアイスは思わなかった。

そしてアンネローゼのことがある。アンネローゼもまた、ラインハルトの病臥に辛労を重ねているだろうことは想像に難くなかった。ラインハルトの治療上の要請から、彼女が旧帝都に
オーデイン
戻ったこともキルヒアイスには伝えられている。ラインハルトへの治療にはアンネローゼの健康をもある程度まで犠牲に供せ

ざるを得ず、ためにアンネローゼもラインハルトとともに
ノイエ・サンスーシ
新無憂宮南苑の病床にあるという。キルヒアイスにとつて、まるで火で炙られるような焦慮を抱かずにはいられない状況だった。

そんな中、ロイエンタールに関する報告と共に届いたのがアンネローゼからの書簡だった。

『ラインハルトも私も大丈夫です。案じないでとは言いません。為すべきことを何もかも放り捨てて戻ってくるようなジークでないことを信じています』

書簡は映像も伴っており、顔色も優れず、ベッドから半身を起すのがやつとの様子に見えながらもアンネローゼは笑顔を見せてくれていた。

『……私は、今は体調は良くありません。ラインハルトの治療に必要な……その骨髓細胞を採取したためだと聞いています。余り詳しいことは話してはいけなさと皆さんには言われていますし、私自身、ドクトルの説明を完全には理解できていないのですが、これは二ヶ月ほど続くそうです。でもジーク、案じないで。終われば、体調は回復するそうです。ラインハルトも、この二ヶ月を耐え抜ければ、回復の可能性が大きく上がると保証してもらっています』

アンネローゼは三日に一回程度ラインハルトと映話で話し、ラインハルトもまたキルヒアイスに会いたがっているが、同時に帝国大公としての勤めを果たしてくれるよう望んでいると告げた。

『……それでは、ジーク。身体に気をつけて。また逢う日まで』
アフフ・ヴァーダーゼーエン
アンネローゼが笑顔で軽く手を振りふっと映像が消える。見

慣れた笑顔に見えたが、キルヒアイスは微かな違和感を持った。映像が消えるのが早すぎるのではないか……再生し直してみても、キルヒアイスは小さな驚きが胸を突き上げるのを感じる。最後の最後、アンネローゼの表情が明らかに崩れていた。目を固く閉じ、肩を震わす姿が一秒の何分の一か、確かに映っていた。泣き崩れそうなのを必死でこらえて慌ててスイッチを切つたに違いなかった。

「アンネローゼ……さま」

ラインハルトの容態がそこまで悪いとは信じたくなかった。しかし、アンネローゼが、ただ一人の肉親であるラインハルトの病状に心を痛め、孤独に耐えているに違いないことをキルヒアイスは察した。何もかも放りだして席を立ち、『帝都へ向かう。』『バルバロッサ』出航の準備をせよ！——そう叫びたい衝動を抑えるのがやっとだった。ラインハルトも、またアンネローゼもそれを望まない。その想いだけがキルヒアイスを辛うじて抑えた。

それだけにロイエンタールに対する告発はキルヒアイスの不安を煽った。経緯はどうあれ、告発の狙いがロイエンタールの肅清であることは確かだった。特に奇禍によってヤンの存在が喪われた今、帝国を脅かす軍事的脅威は消滅したと言って良い。今後、有能な武将よりも、文治に長けた官僚が優位を占めるに違いない帝国内で、ロイエンタールはオーベルシュタインの言う『有能なら有能なりに組織を損ねる』存在に違いない。無論、その言葉はキルヒアイス自身にも、さらにはミッターマイヤーやビッテンフェルトといったいわゆる武断派と目される将帥たちにも、そのまま適用可能なのだ。

ラインハルトが軽々にロイエンタールの失脚・肅清を認めるとは思わなかった。唯一の懸念は、病気からくる気力の衰えだったが、ロイエンタールに対する裁定は彼を安堵させるに十分だった。

ベルゲングリューンが言う。

「なにごととも不可能なことはい言いますから。それに、皇帝陛下の周囲がロイエンタール元帥に好意的な人間ばかりとは限りません」

「周囲の言葉に惑わされて判断を左右されるような陛下ではありませんよ、大將」

「それは理解しております。これで閣下がフェザーンに戻られれば、ロイエンタール元帥に新領土を託することが出来ます。閣下のご苦勞もいささかなりと軽減できましょうし、旧帝都^{オールドイン}に戻られて陛下とお会いになることもできましょう」

「後事を託するにしても、今少し状況を改善しておかないとロイエンタール元帥に苦勞のみを押しつけることになります。まだ、休めませんよ」

再び感じの良い微笑を浮かべたキルヒアイスは、さて……と話題を切り替えた。ベルゲングリューンを呼び出した理由についてである。

キルヒアイスの言葉に、ベルゲングリューンは眉を顰めた。

「フェザーンへ行け、とおっしゃるのですね」

「そうです。是非、直接会って相談をしてほしい人物がいます」キルヒアイスの口にした人名に、ベルゲングリューンの眉が鋭角的な確度に跳ね上がった。

「はあ……それは、ご命令とあればとやかくは申しません

が……できれば、なぜ、秘密裏に、それもよりによって軍務尚書と会わねばならないのか、その理由だけでもご教示願えませんでしょうか」

ベルゲングリューンはキルヒアイスの参謀長であり、帝国軍大将であると言え、オーベルシュタインに対しては下僚としての礼を取らねばならない。理由もなく、人払いせよなどと要求できる立場ではない。キルヒアイスもその点についての異論はないし、ベルゲングリューンにだけはことの背景を十分に説明するつもりでもいた。

「見てください」

キルヒアイスが自身のコンソールに書類を表示させ、ベルゲングリューンを差し招く。電子書類なら転送してくればいいだけのことなのに……戸惑いを隠せないままにベルゲングリューンが執務机を回り込むと、遮音力場のふわりとした感触が身体を包み込む。彼ら二人以外誰もいないはずの執務室である。さらに強ばったベルゲングリューンの表情は、表示された文書を辿るに連れ、驚愕をともなったものに変わった。

「これは……閣下!?!」

「シュミットバウアー文書。その内、フェールで失われたはずのシュミットバウアー家当主の手記からの抜粋です。失われたはずの文書がなぜ私の手許にあるのか、原本がどこにあるのかについては今は説明を省きます、宜しいですね、大将」

「え、ええ……」

生唾を飲み下すようにして、ベルゲングリューンが文書を読み進める。九〇〇〇枚を超える、古い ヤーバ・シユ・パビエール 紙に

シユヴァルツェ・ティンデ 墨 で書かれた文書が、歴代のシュミットバウアー伯

爵家当主の残した手記だったことを明らかにしたのは、帝立大学のローゼンマイヤー教授と彼女のスタッフだった。昨年六月、国立文理科大学で起きた爆破事件で多くの研究員を失って研究は頓挫するかに見られた。他の大学から招聘された研究員が ノイエ・サンスーシ 新無憂宮に集められ、ローゼンマイヤー教授の研究チームに加わったのはキルヒアイスの密かな手配によるものだった。

抜粋された手記は、晴眼帝時代の当主フローリアン・フォン・シュミットバウアーを初めとして、コルネリアス一世時代に女性として初めてシュミットバウアー伯爵となったフリーデ・ゲルトルデー、彼女の跡を継いだローレンツ・ナタニエル、さらにその後、二人目の女性当主であるリーゼロッテ・フリーデの四人の手になるものだった。これだけで約三〇〇〇枚もの文書が遺されていたが、キルヒアイスがローゼンマイヤー教授に依頼したのは、シュミットバウアーたちと敵対していたと思われるある組織に関する記載の抽出と、その組織の性格に関する分析だった。

「皇帝陛下の即位から『回廊の戦い』までに、陛下や私が直面した陰謀についてはある程度知っているとします」

「フェザーンの黒狐の仕業……ではありますまいか。」

『ラグナロク神々の黄昏』以来、奴は地下に身を潜めている。しかし、決して復権をあきらめたわけではない。軍部内でもそれが定説となっておりますが?」

領き、キルヒアイスは質問を放った。

「ええ、では彼はどのようにして陰謀を実行に移していると思いますか?」

アドリアン・ルビンスキーが潜伏しているのはおそらくは

フェザンであろう。しかし、事件が起きているのは旧帝国領、特に旧帝都^{オーデイン}であり、更にロックウェル大将によるレベロ最高評議会議長の暗殺を指囃したのもルビンスキーであるとすれば、彼の手は新領土にも伸びていることになる。

「私が分析を依頼した、このある組織とは実行部隊のことです」「それは……地球教徒ではないのですか？」

「かも知れません。しかし、昨年の事件が起きたとき、少なくとも地球教徒は旧帝都^{オーデイン}からは一掃されていました。地球教徒とは直接関係のない、おそらくはフェザンとは一見独立した何らかの組織が存在する。それが私の意見です。それを、ローゼンマイヤ教授が裏付けて下ったのです」

「なんと……」

ベルゲングリューンは慌てて文書を読み進める。鋭角的な輪郭を描いた容貌が引き締まり、眉間が深いしわを刻み込む。

「それと……ヤン艦隊のユリアン・ミンツ大尉です」

「ああ、あの感じのいい少年ですね……彼が？」

「彼は昨年、地球教徒の巡礼を装って地球の地球教本部に潜入したのです。ちょうど、ワーレン提督の地球教本部討伐が実行されたとき、彼はヒマラヤ山中の地球教本部にいたそうです」

帝国軍の地上部隊突入の混乱に紛れて、ユリアンたちは書庫^{アーカイブ}から相当量の機密書類を持ち出すことに成功していた。ヤン艦隊自身でもその内容を分析し、フェザン自治領主府と地球教徒の思いもかけぬつながり、さらに帝国・同盟領内に張り渡されたフェザンのネットワークをも解きほぐすに至っていたのである。商業国家フェザンの隠された形相に、さすがのヤンが慄

然と暗然の相半ばする表情を隠しきれなかったほどだという。

「先日のヤン・ウエンリー・提督遭難の時です。ミンツ大尉は、帝国軍がヤン提督の敵を敵としてくれるなら、手を携える用意があると云ってくれました。その証として、地球教本部からの情報を提供してくれたのです」

それがヤン提督のご意思でもあります……情報を収めたディスクを手渡すとき、ユリアンはそう言い切った。ヤン自身が、『フェザン自治領主と地球教、この二つを共通の敵にできれば、帝国とは同じ側に立てる可能性がある。特にキルヒアイス帝国大公とは……ね』と言っていたというのだ。

シュミットバウアー文書と地球教本部からの機密情報、ローゼンマイヤ教授らによる分析が一つとなった結果、地球教徒以外のもう一つのフェザン自治領主府の実働部隊の存在がおよろげに浮かび上がってきたのだ。

シュミットバウアー一族が彼らを敵視したのは、一度ならず皇帝暗殺事件の影で暗躍する彼らの姿を見いだしていたからに違いなかった。暗殺者たちは、あるいは側近の一人として、あるいは側室として、易々と皇帝の間近に入り込んでいた。シュミットバウアー一族に同情するならば、ゴールデンバウム王朝の歴代皇帝は、彼らの身を守るはずのシュミットバウアーたちを忌避する一方、暗殺者に対してはその門戸を閉ざすことすら思い浮かばなかったのだ。

「このような組織が本当にあると……？」

「あるのでしょう。実在し、ルビンスキーやその協力者と連携し、おそらくは独立に動くこともあるに違いありません。フェールで調査隊を襲ったのは、たぶん後者でしょうけれど、昨年の

旧帝都^{オールドイン}での騒ぎは連携しての策謀と考えて良いはずです」

「これは……大変な任務ですが……」

「このような情報はうっかり回線に載せることもできません。ローゼンマイヤー教授からの報告も、こちらに来て以降は基本的には通信回線では受け取っていないのです。ミンツ大尉からの情報も媒体を直接もらいました。当然、軍務尚書に通信回線で送付するなど思いもありません」

「ゆえに小官に赴け、と」

「ええ、メッセンジャー・ボーイの役、務めていただけますか？ 私にとつて最も信頼し得るメッセンジャー・ボーイです」

苦笑し、ベルゲングリーンは挙手の礼を取った。

「閣下はお狡い。そのような命令のされ方をされたのでは、断りようがありません。謹んでメッセンジャー・ボーイ、務めさせて頂くでありますよう」

「済みません、大将。これは絶対に成功してもらわねばなりません。過てば……」

「帝国の存否に関わる事態となる……と？」

微笑を消し、キルヒアイスは苦いものを噛みしめる表情になる。

「……かも知れません」

「ご命令、承りました。この身に代えても、必ず軍務尚書に事の次第を伝えます」

「お願いします……申し訳ありません、大将。もう一つお願いしたいことがあるのです」

「は……？」

苦笑して良いのか、渋面に戻るべきなのか、迷う風のベルゲン

グリーンにキルヒアイスは切り出した。

「人を連れて行ってほしいのです。フェザーンへ、最終的には旧帝都^{オールドイン}へ」